

Guy Gundaker から学ぶロータリー

「A Talking Knowledge of Rotary」の世界

～ 日本人の「ロータリーの原点」は、ここにある ～

(2015 年 5 月 8 日 初稿、2019 年 9 月 5 日 最終改訂 文責：鈴木一作)

本書の内容は、Guy Gundaker 著「A Talking Knowledge of Rotary」の翻訳ではなく、あくまで解説です。というのは、今を生きる日本のロータリアンには、単なる翻訳だけでは難解な箇所も多く、Guy Gundaker の意図も通じにくいからです。しかも、原著では項目によって少なからず重複があったり、本来の主旨から外れてやや脱線気味な箇所もあったりします。

そこで、本書では「A Talking Knowledge of Rotary」に書かれている内容を紹介しながら、我々日本人が考える「ロータリーの原点」というのは、実は“Guy Gundaker のロータリー観”にあることに気づいていただき、それを、今後のロータリーにどう活かすべきか、または活かせるかを主眼に置いて、分かり易く解説することに努めました。

本書を読んでくださったロータリアンには、Guy Gundaker の大ファンになっていただき、ロータリーを今まで以上に大好きになってくだされば、望外の喜びです。

<目次>

1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
2. ロータリークラブの構成と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
 - 【1】第1「会員一人一人の向上」
 - 【2】第2「会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）」
 - 【3】第3「会員の職種・業界全体の向上」
 - 【4】第4「会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上」
 - 【5】ロータリーの特徴
 - ◎ 追記Ⅰ. 「決議 23-34（冒頭の文章）」と「ロータリーの目的（第3）」への流れ
 - ◎ 追記Ⅱ. ロータリーの基盤
 - ◎ 追記Ⅲ. ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割（具体例）
3. ロータリアンたる者、かくあるべし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
 - 【1】ロータリアンにとって「例会出席」とは？
 - 【2】ロータリアンにとって「活動」とは？
 - ①個人としての活動
 - ②ロータリークラブにおける活動
 - ③同業者の団体における活動
 - ④公共的かつ慈善的奉仕
 - 【3】ロータリアンにとって「利益」とは？
 - 【4】ロータリーの「究極の目的」とは？
4. 会員に対するロータリークラブの義務と責任・・・・・・・・・・・・・・・・28
 - 【1】クラブの「問題点の発見」と「改善」
 - 【2】「親睦（fellowship）」の正しい意味
 - 【3】「例会」や「行事」の在り方
 - ①「例会」と「行事」の全般について
 - プログラム委員会、理事会、会長の責任
 - ②昼食例会について
 - 会員の未知の能力を引き出し、かつ会員同士が理解を深め合う例会
 - *クラブ会員またはゲストスピーカーによる卓話プログラム
 - *ロータリーを学ぶための卓話プログラム
 - 会員の心に、最高の職業倫理基準を植え付ける例会
 - 奉仕の扉を開く例会
 - 会員の事業に助力を与える例会
 - ③夕刻の例会について
 - ◎ 追記Ⅳ. 例会の大切さ
 - ◎ 追記Ⅴ. 充実したクラブ運営

5. 自己の職業分野と社会に対するロータリアンの義務と責任・・・・・・・・・・40

【1】ロータリーの基本と応用

【2】自己の職業分野に対する「ロータリアンの義務と責任」

- ①ロータリアンは、ロータリーから各々の業界に派遣した代表である
- ②ロータリアンとは、本人と事業内容に絶大な信用がある人物である
- ③各業界における「職業倫理訓」作成の必要性

【3】社会に対する「ロータリアンの義務と責任」

- ①「他人のための活動」は、ロータリーの会員教育がもたらす
- ②「良き家庭人」、「良き事業人」、「良き市民」
- ③ロータリーの中立性

◎追記VI. ロータリーとは？

6. まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

【1】Guy Gundaker が考える「ロータリーの根幹」

【2】Guy Gundaker が考える「ロータリーの姿」

【3】本解説書の「要点」

- 信頼
- ロータリアンの個人としての活動
- ロータリアンの利益
- 新入会員
- 教育的性格
- 真のロータリアン
- 親睦
- 同業者の団体
- クラブ・リーダー
- ロータリーの基本と応用
- ロータリーとは？
- クラブ運営
- 例会
- その他（1）
- その他（2）

1. はじめに

最近、“ロータリーの原点に戻ろう”とか“ロータリー原点回帰”などの言葉を、よく耳にします。では、その『ロータリーの原点』とは何でしょう？そして、それが『ロータリーの原点』である根拠は何でしょう？また、それはいつのことを指して言うのでしょうか？実は、これらは意外に難問です。この3つの質問に対する明確な回答を持っていて、その上で『ロータリーの原点』を口にされるロータリアンは、果たして、どのくらいいるのでしょうか。

例えば、ロータリー創立時（1905年）を「ロータリーの原点」と言う人がいます。しかし、それでは「異業種の実業人における友情」と「実業互恵」の2つが原点になってしまい、少なくとも「奉仕」は含まれません。また、最近の「職業奉仕の軽視」を心配する人の中には、1915年の道德律（職業倫理訓）や1927年の四大奉仕分割を「ロータリーの原点」と主張する人がいます。また、1923年に採択された「決議 23-34」を挙げる人もいます。ところが、そういう人達が語る「ロータリーの在り方」は、「道德律（職業倫理訓）」や「四大奉仕分割」や「決議 23-34」の理念や内容だけではないのです。

Gundaker の著作「A Talking Knowledge of Rotary」（1916年）の日本語翻訳本には、

- 「ロータリー通解（小堀憲助）」
- 「ロータリーの心得（田中毅）」

の2冊があり、ロータリーの入門書として有名です。これらを読んでも分かることですが、これまで書物や講演などで日本の著名なロータリアンが声高に述べてきた「ロータリーの在り方」をはじめとした“ロータリーの理念や解説”は、その多くが「A Talking Knowledge of Rotary」に掲載されている内容、または、それに準じた内容ばかりです。つまり、日本のロータリアンが考える「ロータリーの原点」は、Guy Gundaker のロータリー観によるところが大きいのです。

その理由は、日本のロータリー草創期の米山梅吉や福島喜三次らが「A Talking Knowledge of Rotary」を参考にしながらクラブ運営をされていたこと、さらに小堀憲助、田中毅の両先生が日本語翻訳本を出版されたこと、しかも内容自体が日本人の感覚や商売道德思想に近いものであったこと、等々によるものでしょう。



Guy Gundaker

「A Talking Knowledge of Rotary」は、ロータリー誌「THE ROTARIAN」の1916年4月号、5月号、6月号、7月号に掲載された Guy Gundaker の記事「Educational Pamphlets for Rotarians」（pamphlets No1-No4）に基づいて、国際ロータリークラブ連合会の Committee on Philosophy and Education（理論・教育委員会〈委員長：Guy Gundaker〉）によって編集された4冊のパンフレットから成る小冊子です。その内容は、

**当時のロータリーの「一般奉仕概念」と「クラブ運営の在り方」を
体系化したもので、史上初めてのロータリーの教科書・解説書**

と言ってもよいでしょう。

この小冊子は、1916年7月の米国オハイオ州シンシナティ国際大会で「ロータリーのクラブ管理運営のテキスト」として採択・認証され、その後の普及にも弾みがつきました。

また、この小冊子には、1915年の米国カリフォルニア州サンフランシスコ国際大会で採択された

「The Rotary code of Ethics For Business Men of All Lines」

(全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓：道德律(職業倫理訓))

の全文も掲載されており、「道德律(職業倫理訓)」の普及にも大いに貢献したと言えるでしょう。しかも驚くべきことに、こうした出来事は、まさに第一次世界大戦(1914~1918年)の最中に起きたのです。

Guy Gundaker (1873~1960) はフィラデルフィア・クラブの創立会員の一人で、職業分類はレストラン経営です。出身は米国ペンシルバニア州で、コーネル大学、ペンシルバニア州立大学法学部を卒業し、1902年に弁護士登録をしています。その後、彼はレストラン経営に身を転じていますが、全米レストラン協会を結成して「レストラン協会の道德律(職業倫理訓)」を作ったことでも知られています。

実は、Guy Gundaker は1923-24年度のRI会長です。したがって、日本人が重要視している「決議23-34」の採択時(1923年6月)は、RI会長エレクトでした。しかも、その決議文には、後述の通り、「A Talking Knowledge of Rotary」の内容が色濃く反映されているのです。

また、1923年(大正12年)の日本の関東大震災に際し、RIその他から東京RC(当時の会長は米山梅吉)へ総額89,000ドル(42,000ドルなど、諸説あり)の義援金を贈ってくれたのもGuy Gundakerでした。日本にとっては、とても縁の深い人物なのです。

最近、「A Talking Knowledge of Rotary」の存在はおろか、Guy Gundaker という名前すら知らないロータリアンも少なくありません。しかし、日本のロータリーの“これまで”と“これから”を考えていく上で、日本人の「ロータリーの原点」とでも言うべきGuy Gundakerのロータリー観は欠かせないと思うのです。これが、本解説書を世に出した理由です。

Guy Gundaker のロータリー観は多岐にわたりますが、その根本は、

- ロータリーは、自分自身を、事業を、職種・業界を、そして社会全体を向上させる運動である。
- 究極の目的は、世間から信頼・尊敬される素晴らしい真のロータリアンを育てることである。

の2つと言ってよいでしょう。本解説書を読まれる際は、この2つを念頭に置いてください。

なお、気をつけて欲しいことは、本書で使われている『奉仕』という言葉の意味です。というのは、『奉仕』を“クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕”に分けて考えるようになったのは、1927年の米国オステンド国際大会で「目標設定計画に基づく四大奉仕の分割」が採択されてからです。

したがって、1927年以前(「A Talking Knowledge of Rotary」が発行された1916年当時)は、
『奉仕』 = 家庭、クラブ、職場、業界、地域社会、州、国など、あらゆる場面や状況での奉仕
であり、これら全体を呼称して『社会奉仕』とも表現する

ということです。すなわち、現在の「社会奉仕(= 地域社会奉仕)」とは区別すべきであって、

本書で使われている『奉仕』 = 1927年以前の『社会奉仕』 = あらゆる場面や状況での奉仕
= 現在の『クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕、その他の奉仕(家庭奉仕など)』

という理解が必要です。この点については、十分ご注意ください。

2. ロータリークラブの構成と目的

「A Talking Knowledge of Rotary」の最初のページには、ロータリークラブを構成する会員の資格、そしてロータリークラブの目的について、以下のように記されています。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

- 第1. 会員一人一人の向上
- 第2. 会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）
- 第3. 会員の同業者・業界全体の向上
- 第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

A Rotary club consists of men selected from each distinct Business or Profession, and is organized to accomplish:

*First: The **Betterment** of the Individual Member.*

*Second: The **Betterment** of the Member's Business, both in a practical way and in an ideal way.*

*Third: The **Betterment** of the Member's Craft or Profession as a whole.*

*Fourth: The **Betterment** of the Member's Home, his Town, State and Country, and of Society as a whole.*

先ず注目して欲しい点は、冒頭の

「ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成」という表現です。これは『一業種一会員制』という規定であると同時に、後述するように

「ロータリーから各々の職種・業界に送られた代表者（大使）としての認識や義務を求める」という規定でもあるのです。（→ P10 参照）

二つ目の注目すべき点は、上記の第1～第4までの全てに『向上（Betterment）』という言葉が使われていること。すなわち、

「ロータリークラブは、『向上』が目的である」

と明記されていることです。しかも、上記の文章には、ロータリー創立（1905年）当初における目的の1つであった『親睦』を示唆する表現すらないのです。すなわち、

「ロータリーでは、『親睦』は（後述するように重要だが）目的ではない」

という意味でもあるのです。（→ P28 参照）

三つ目の注目すべき点は、

「ロータリーは、自分自身、事業、同業者・業界、そして社会全体を向上させる運動である」という Guy Gundaker のロータリー観の根本（→ P4 参照）の1つが、上記の文章に凝縮されていることです。

四つ目の注目すべき点は、この Guy Gundaker の考え方が、1923 年の『決議 23-34（冒頭の文章）』、そして現在の『ロータリーの目的（第3）』に受け継がれていったことです。（→ P18 参照）

＜決議 23-34（冒頭の文章）＞

ロータリーにおいて社会奉仕とは、ロータリアンのすべてがその個人生活、事業生活、および社会生活に奉仕の理想を適用することを奨励、育成することである。

＜ロータリーの目的（第3）＞

ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること



以下、この「ロータリークラブの構成と目的」の第1～第4の詳細について、順番に説明していきます。

【1】第1「会員一人一人の向上」~~~~~

最初に、第1「会員一人一人の向上」についてです。これに関して Guy Gundaker が説明した内容は、下記の

＜ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割＞の5項目

だけです。5項目とも簡潔で分かり易い表現であるだけに、それ以外のことは何も述べなかったのでしょうか。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第1. 会員一人一人の向上

＜ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割＞

- 1) 会員同士が事業経営上の経験を交換し合い、見識が広がるようにしてあげること
- 2) 会員の思考の幅を広げ、向上心を喚起させること
- 3) 奉仕の心を涵養せしめること
- 4) 自己発展の最大の可能性が得られるように支援すること
- 5) 優れた社会的指導者に育てること

第2. 会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）

第3. 会員の同業者・業界全体の向上

第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

上記の＜ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割＞の5項目は、まさにクラブの

「例会運営、会長挨拶、例会プログラム、委員会活動」の4つが充実しているかどうかにかかっていると、私は思います。（→ P18 参照）

例えば、皆さんのクラブの例会では、上記の5項目で述べられているように

- 1) 会員同士の情報交換の時間、事業経営に関する会員スピーチの機会は、十分ありますか？
また、会長挨拶、例会プログラム、そして各種委員会活動は、
 - 2) 会員の思考の幅を広げて、向上心を奮い起し、
 - 3) 奉仕の心を育て、
 - 4) 会員自らの発展や可能性の拡大に繋がり、
 - 5) 社会のより良い指導者として成長していく
- ことに、大いに貢献できているでしょうか？

「不易流行」という言葉がありますが、私は

“Guy Gundakerが記した<ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割>5項目は、
「ロータリークラブの在るべき姿」として最も大切にし、かつ変えてはいけないもの“
だと思います。少なくともクラブ会長には、最も留意して欲しい5項目です。(→ P18 参照)

【2】第2「会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）」~~~~~

<ロータリークラブの構成と目的>

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第1. 会員一人一人の向上

第2. 会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）

<現実面>

ロータリー活動を通して会員間に友情に満ちた親密な付き合いが生まれ、取引増加の機会が与えられる。

（但し、与えられるものは、取引増加の「機会」だけである）

<理想面>

ロータリー活動を通して、事業における高い倫理基準と正しい経営方法が体得できる。そして、個人生活、事業生活、社会生活など全ての場で実践すべき規範・手本でもあり、かつ職業倫理全般にも通じる「奉仕という生き方（ロータリーの理想）」を会員一人一人が学び合い、実践することで、事業が向上・発展する。

第3. 会員の同業者・業界全体の向上

第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

次は、第2「会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）」についてです。

先ず、前半の<現実面>についてですが、Guy Gundaker は

“ロータリアンは、普段のロータリー活動を通して、他の会員から『信頼』を得ることが何よりも大切です。ロータリーは職業人の集まりなので、本来、「取引増加の機会」は備わっています。したがって、その『信頼』という財産を活かしながら、優れた商品、適正な価格などの『奉仕』に徹していけば、事業は向上・発展していくのです。”
という主旨の説明をしています。

もう少し分かり易く言えば、

“ロータリーに入会しても、取引が増えるとは思わな。入会后、ロータリー活動を通じて『信頼』や『人柄』が皆から認められるようになって初めて、『取引増加の機会』に恵まれたロータリーを活かせるようになり、自己の事業の向上・発展にも繋がるのだ。”
という意味です。この内容は、新入会員に必ず説明して欲しいと思います。(← P34、p43 参照)

また、上記の<現実面>の最後に記されている

「但し、与えられるものは、取引増加の『機会』だけである」

について、Guy Gundaker は

“ロータリアン同士の取引はロータリーの義務ではないし、ロータリーの本質でもないし、ロータリーの存在理由でもない。取引増加の『機会』があるというだけで、ロータリーにおいては、ロータリアン同士の取引は単なる付随的な要素にしか過ぎない。”
と説明しています。要するに、彼は

「ロータリー創立以来の目的の一つであった『実業互惠』からの脱却を求めている」ということです。

次に、後半に記されている<理想面>についてですが、

「ロータリー活動を通じて『事業推進に必要な倫理および経営方法』と『ロータリーの理想(奉仕という生き方)]を学び、それらを日常生活の中で実践すれば、やがて事業は向上・発展する」

というように理解すればよいでしょう。

その上で、『事業推進に必要な倫理および経営方法』と『ロータリーの理想(奉仕という生き方)]を示すスローガンとして、

- 「Service, Not Self」
- 「He Profits Most Who Serves Best」

という、ロータリーの2つの標語 (Motto) を挙げているのです。

但し、後述するように、Guy Gundaker はロータリーの2つの標語 (Motto) について、なぜか詳しい解説をしていないのです。その理由についての考察は、『3) ロータリアンたる者、かくあるべし 【3】 ロータリアンにとって「利益」とは?』の項目を参照してください。(← P25参照)



(なお、現在のロータリーの標語は、前者については「Service Above Self (超我の奉仕)」に、また後者については「One Profits Most Who Serves Best」に変更されています。)

そして、このロータリーの2つの標語 (Motto) の関係を明記したものが、1923年に採択された『決議23-34』の1) の文章です。2つの標語 (Motto) の理解のためにも、その内容を以下に提示しておきますので、参考にしてください。

<決議 23-34 の1)：公式和訳>

ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—「超我の奉仕 (Service Above Self)」の哲学であり、これは、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる (He Profits Most Who Serves Best)」という実践的な倫理原則に基づくものである。

<参考：決議 23-34 の1) を分かり易く要約した文章>

ロータリーの根本は、利己と利他の心を上手く調和させる「超我の奉仕」という名の人生哲学です。それは、実生活上、実に道理にかなった「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という言葉を原理原則とした人生哲学です。

(前段にある「公式和訳」は少し分かりづらいので、分かり易く要約した文章を後段に追加しました)

さて、Guy Gundaker は、本項目『ロータリークラブの構成と目的』の「第1」と「第2」について説明した直後に

このようなロータリーの活動は、『**ロータリーの基本 (Fundamental Rotary)**』であり、会員の心に関わるものだけでなく、事業経営の精神にも関わるものである。そして、この活動はクラブ・リーダーの責務である。

一方、ロータリーで十分な経験と学びを重ねていくうちに、ロータリアンとして活動したくなる奉仕の分野が別に2つある。その2つが、『**ロータリーの応用 (Applied Rotary)**』と呼ばれるものである。それは、『**ロータリーの真髄 (The essence of Rotary)**』と言ってもよいだろう。ロータリーで十分に教育と訓練を受けたロータリアンなら、そうした活動 (**Rotary - at - Work**) を自然と始めてしまうだろう。それは、クラブ会員の責務でもある。

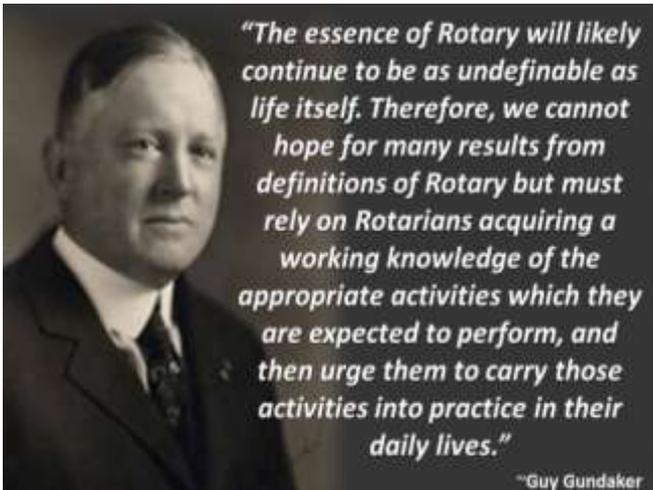
という主旨の文章を挿入した上で、その2つの『**ロータリーの応用 (Applied Rotary)**』として、次の「第3」と「第4」の説明を始めるのです。

要するに、上記の内容を分かり易くまとめると、以下のようになります。

<ロータリークラブの構成と目的>

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

- **ロータリーの基本：クラブ・リーダーの責務**
 - 第1. 会員一人一人の向上 (会員の心に関わるもの)
 - 第2. 会員の事業の向上 (事業経営の精神に関わるもの)
- **ロータリーの応用 (ロータリーの真髄)：クラブ会員の責務**
 - 第3. 会員の職種・業界全体の向上
 - 第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上



Guy Gundaker は、『ロータリーの応用 (Applied Rotary)』として、「第3」と「第4」に関する日常生活での活動 (Rotary - at - Work) こそが、左の写真上の文章にもあるように、『ロータリーの真髄 (The essence of Rotary)』であると考えていたのです。

The essence of Rotary put - to - service becomes “Rotary applied.”

(Guy Gundaker)

この「ロータリーの基本と応用」については、p40にも説明があります。ご参照ください。以下、『ロータリークラブの構成と目的』の「第3」と「第4」について、解説を続けます。

【3】 第3「会員の職種・業界全体の向上」~~~~~

<ロータリークラブの構成と目的>

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第1. 会員一人一人の向上

第2. 会員の事業の向上 (現実と理想の双方において向上)

第3. 会員の同業者・業界全体の向上

ロータリアンは、各々の職種・業界にロータリーから選ばれて送られた代表である。したがって、ロータリアンは各々の職種・業界において職業倫理と奉仕を普及させる義務があり、それによって職種・業界全体が向上・発展していく。

第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

次は、第3「会員の職種・業界全体の向上」についてです。ここでは、Guy Gundaker は「ロータリアンは、ロータリーから各々の職種・業界に送られた代表者 (大使) である以上、他の同業者に働きかけながら、職業倫理と奉仕の普及に努めるべきである」と述べた上で、

「自己の職種・業界全体を向上・発展させていくという認識と義務を、ロータリークラブ会員は持たなくてはならない」

と強調しています。

これらの内容は、しばしばクラブのベテラン会員が口にされるもので、多少の経験年数のあるロータリアンなら聞いたことがあると思います。しかし、最近はクラブ内のロータリー教育が疎かになってきたせいも、上記の“認識と義務”を知らない、または聞いたこともないというロータリアンが少なくないようです。私としては、とても残念です。

実は、この第3「会員の職種・業界全体の向上」の解説の最後に、Guy Gundaker の言葉
“This is Rotary’s greatest opportunity for service”
があります。すなわち、

「会員の職種・業界全体の向上をもたらすことは、
ロータリーにとって最大の奉仕の機会である」

ということです。それだけに、日本のロータリアンは自己の事業経営だけではなく、
職種・業界全体の向上についても、“もっと尽力できる”、あるいは“もっと尽力すべき”と
思っていたきたいです。

なお、ここの「会員の職種・業界全体の向上」については、別項目（← P 23、P 41 参照）
でも述べられていますので、ご参照ください。

【4】第4「会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上」~~~~~

最後は、第4「会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上」です。これについては、
「ロータリーでより良い人間に成長すれば、より良い実りある生活、より心のこもった
交流や奉仕ができるようになり、それによって皆が幸せになっていく」

という理解でよいと思います。

<ロータリークラブの構成と目的>

ロータリークラブは異なった事業または専門職種から選ばれた者を以て構成され、
次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

- 第1. 会員一人一人の向上
- 第2. 会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）
- 第3. 会員の同業者・業界全体の向上
- 第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

ロータリーの世界は、会員をより良い市民、より良い商工会議所の会員、
より良い国民となるように訓練するものである。それによって、市民生活
と慈善行為の両面が実りあるものとなり、会員の家庭、町、州、国、
ならびに社会全体が向上していく。

上記の内容に出てくる

『訓練する (train)』

という表現ですが、「ロータリーの例会は、人生の道場である」、「入りにて学び、出でて奉仕せよ」、
「自己研鑽の奉仕」など、まさにロータリー特有の言葉を思い出します。

また、後述するように（← P14参照）、Guy Gundaker は他のクラブにはない
ロータリーの大きな特徴として、

『教育的性格 (educational in character)』

を挙げています。要するに、Guy Gundaker のロータリー観の根本は、

「自分自身を、事業を、職種・業界を、そして社会全体を向上させるために、
ロータリークラブで素晴らしい真のロータリアンを育てる」

ことであり、そのためのテキストが、この「A Talking Knowledge of Rotary」なのです。

さて、Guy Gundaker は、第4「会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上」に関連して、以下に記した6つについても述べています。

- 1) 地域社会の状況や活動については、ロータリーの会合で自由な討議がなされるべきである。
- 2) 会員が市民生活の向上のために積極的に活動・参加できるように、知識や知恵を提供するのは、クラブ役員の義務である。
- 3) 一般的には、市民生活に対するロータリアンの関心は、ロータリークラブとしての活動より、むしろ個人として、または商工会議所の会員としての活動に結びつくべきである。
- 4) 社会奉仕のためにロータリークラブが団体行動をするのは、特別な場合ならよい。但し、事前に慎重な配慮が必要である。特に、ロータリークラブとしての活動が、どの町にもあるような専門事業団体の活動と重複するものであってはならない。
- 5) 地域社会のことで政党が決定した内容については、クラブとして賛否の意思表示をしてはならない。これは、クラブ会員間の尊い友情を守るためである。
- 6) ロータリーの慈善事業については、どんな制限も決まりごともない。したがって、どのような慈善事業を実施してもかまわない。

上記の 1) ~ 5) については、解説は不要でしょう。ロータリアンなら当然のことであり、またロータリークラブとしても、当然のことだと思います。

但し、6) の内容については、疑問を抱いた方がいると思います。特に、6) の内容を 3) や 4) の内容と比較した場合、矛盾を感じた方も少なからずいたのではないのでしょうか。本筋からは多少ずれますが、これについて少し解説します。

3) と 4) をまとめれば、

「市民生活についてロータリアンが関心を持つことについては、条件さえ合えばロータリークラブによる社会奉仕事業として団体行動をしてもよい。しかし、本来は、むしろ個人としての奉仕活動として行なうべきである」

という内容です。

これに対して、6) は

「ロータリークラブは、慈善事業を行うのは何ら差し支えない」

という内容です。

要するに、当時は、「ロータリークラブによる社会奉仕事業としての団体行動」と「ロータリークラブによる慈善事業」とは別物という認識があったということです。

ここで言う「クラブによる慈善事業」というのは、欧米特有の小規模なチャリティー活動のようなものであって、そのような活動なら、クラブとして主催するのは問題視されなかったということです。

ところで、上記の3)と4)の内容は、1923年に採択された「決議23-34の6)」、すなわち、「社会奉仕活動の選択指針」によく似ていることに、お気づきになられたでしょうか。

<決議23-34 6)> 「社会奉仕活動の選択指針」

個々のロータリークラブの社会奉仕活動の選択を律する規定は別に設けられていないが、これに関する指針として以下の準則が推奨されている。

- a) ロータリーの会員の数には限りがあるので、ロータリークラブは、市民全体の積極的な支持なくしては成功しえないような広範囲の社会奉仕活動は、他に地域社会全体のために発言し、行動する適切な市民団体などの存在しない土地の場合に限り、これを行うこととすべきであり、商工会議所のある土地では、ロータリークラブはその仕事の邪魔をしたり、横取りをしたりすることのないようにしなければならない。しかし、ロータリアンとしては、奉仕を誓い、その理念の教えを受けた個人として、その土地の商工会議所の会員となって活動すべきであり、また、その土地の市民として、他の善良な市民と一緒に、広くすべての社会奉仕活動に関与し、その能力の許す限り、金銭や仕事の上でその分を果たすべきである。
- b) 一般的に言って、ロータリークラブは、どんな立派な事業であっても、クラブがその遂行に対する責任の全部または一部を負う用意と意思のない限り、その後援をしてはならない。
- c) ロータリークラブが奉仕活動を選ぶ場合に宣伝をその主たる目標としてはならないが、ロータリーの影響力を拡大する一つの方法として、クラブが立派に遂行した有益な事業については正しい広報が行われるべきである。
- d) ロータリークラブは、仕事の重複を避けるようにする必要があり、総じて、他に機関があり、それによって既に立派に行われている事業に乗り出すようなことをしてはならない。
- e) ロータリークラブの奉仕活動は、なるべく現存の機関に協力する形で行うことが望ましいが、現存機関の設備や能力が目的の遂行に不十分である場合には、必要に応じ、新たに機関を設けることにしても差し支えない。ロータリークラブとしては、新たに重複した機関をつくるよりも、現存の機関を活用することのほうが望ましい。
- f) ロータリークラブはそのすべての活動において、宣伝者として優れた働きをし、多大の成功を収めている。ロータリークラブは地域社会に存在する問題を見つけ出すことはしても、それがその地域社会全体の責任にかかわるものである場合には、単独でそれに手を下すようなことはしないで、他の人々にその解決の必要を悟らせる努力をし、地域社会全体にその責任を自覚させて、この仕事がロータリーだけの責任にならないで、本来その責任のある地域社会全体の仕事になるようにしている。また、ロータリーは、事業を始めたり、指導したりするが、一方、当然それに関心をもっていると考えられるほかのすべての団体の協力を得るように努力すべきであり、そして、当然ロータリークラブに帰すべき功績であっても、それに対する自分のほうの力を最小限度に評価して、そのすべてを協力者の手柄にするようにしなければならない。
- g) クラブがひと固まりとなって行動するだけで足りるような事業よりも、広くすべてのロータリアンの個々の力を動員するものほうがロータリーの精神によりかなっていると言える。それは、ロータリークラブでの社会奉仕活動は、ロータリークラブの会員に奉仕の訓練を施すために考えられたいわば研究室の実験としてのみこれを見るべきであるからである。

(下線部が類似する内容)

決議 23-34 は、しばしば「職業奉仕・個人奉仕」推進派と「社会奉仕・団体奉仕」推進派との妥協の産物だったと言われます。妥協の産物とは、特に「決議 23-34 の6)」を指しているのですが、実際には、その7年も前の1916年に、Guy Gundaker が提示していた要点を具体的に詳述し直した内容だったのです。

実は、「決議 23-34」の採択時（1923年6月）、Guy Gundaker はRI会長エレクトでした。もちろん、翌7月からはRI会長です。そのことを考えれば、「決議 23-34」に彼のロータリー観が色濃く反映されていたことは、不思議ではないのです。

【5】ロータリーの特徴 ~~~~~

さて、Guy Gundaker は、以下の文章を本項目の最後に敢えて追記しています。当時のロータリークラブの様相が透けて見えてきて、興味深い内容です。

- 1) ロータリーには、他のクラブにない特徴がある。それは、「教育的性格」である。
Rotary has a distinct field of its own and it is mainly educational in character.
- 2) ロータリーが他の団体と異なる点は、以下の3つである。
 - ①限定会員制度
 - ②会員と会員の職種・業界の双方に関わる活動
 - ③会員に対し、職業上の高い倫理を植え付ける義務を課すこと

（註：②と③が、「教育的性格」に相当します）
- 3) ロータリーは、1905年に（Paul Percy Harris の）1つの着想から生まれた。以来、ロータリーに関する多くの先例が積み重ねられ、かつ多くの著述が残されてきた。その中から、常に厳守すべき重要なことを二つ伝えておきたい。
 - ①ロータリークラブの会合では、決して酒の勢いを借りて議論してはならない
 - ②ロータリーの会合では、発言者は無意味な冗談を言ってはならないこの二つのおかげで、会合では下品な話が避けられ、聴衆が卓話者に対して投げつける皮肉混じりの反論も避けられるのである。
- 4) 可能な限り、あなた自身をロータリーに与えよ。そうすれば、あなたはロータリーから受け取ることができる。しかし、あなたが与えた物以上の物を、ロータリーから受け取ることはいできない。
In so far as you give of yourself to Rotary, you will receive.
You cannot take more out of Rotary than you put into it.

上記の1)で、Guy Gundaker は「ロータリーの教育的性格 (educational in character)」という言葉を使っています。使ったと言うよりも、喝破したと言うべきかも知れません。実際、Guy Gundaker が説いた「ロータリーの教育的性格」は、その後のロータリーにも綿々と受け継がれてきたのです。

例えば、

* 1947-1948 年度 R I 会長 Kendrick Guernsey の言葉

“Enter to learn, go forth to serve.”

(入りて**学び**、出でて奉仕せよ)

* 1954-55年度の R I 会長 Herbert J Taylor (四つのテストの創始者) の言葉

“Rotary is maker of friendships and builder of men.”

(ロータリーは友情を作り、**人を作る**)

* 1974-75年度の R I 会長 William R Robbins の言葉

“Rotary’s first job is to build men.”

(ロータリーの第一の仕事は、**人作り**である)

私自身、これまで講演などで「最も簡潔なロータリーの定義」について語る時、

「ロータリーは、

- ①ロータリアン同士の親睦を基盤に、
- ②立派なロータリアン同を**育てながら**、
- ③価値ある奉仕を通じて

社会に貢献する世界的な団体である」

という説明をしています。(← P48参照)

もちろん、価値ある奉仕の中で最も重要なのは、職業奉仕です。



いずれにしても、「ロータリーの教育的性格」なくして、私はロータリーを語れません。なぜなら、私自身が次のよう思っているからです。

＜ロータリーは、人生を豊かにする＞

ロータリーに入会し、本来なら出会うことすらないであろう立派な方々と友人となり、彼らのロータリアンとしての職業観や人生観、仕事、生き方、そして人柄に触れながら、準備や手続きの心配り、職員管理、自己管理、円満な人間関係の在り方などを学び磨く中、いつしか自分も価値ある立派な生き方（ロータリー精神の涵養と実践）に励むようになるとともに、本来なら経験できなかったであろう素晴らしい機会や感動にも恵まれました。まさに、ロータリーのおかげで人間的にも成長し、人生を豊かにしてもらったのです。

さて、上記の3)には、「ロータリーに関する多くの先例が積み重ねられ、かつ多くの著述が残されてきた」と記されています。確かに1916年以前にも Paul Percy Harris や Arthur Frederick Sheldon などの重要論文は多数ありますし、ロータリー誌「THE ROTARIAN」にも貴重な記事や論文が掲載されてきました。しかし、当時の「ロータリーの一般奉仕概念」と「クラブ運営の在り方」を、ここまで見事に体系化した著述などなかったのです。しかも、その後のロータリーの発展（特に、日本）に、本書ほど貢献した著述もないでしょう。私は、心から Guy Gundaker を尊敬しています。

◎ 追記：「決議23-34（冒頭の文章）」と「ロータリーの目的（第3）」への流れ

ここでは、本項目の冒頭で「四つ目の注目すべき点」（← P6 参照）として述べた Guy Gundaker の考え方が、1923 年の『決議 23-34（冒頭の文章）』、さらには現在の『ロータリーの目的（第3）』に受け継がれていったことについて、私見を交えながら解説します。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

● ロータリーの基本：クラブ・リーダーの責務

第1. 会員一人一人の向上

第2. 会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）

＜現実面＞

ロータリー活動を通して会員間に友情に満ちた親密な付き合いが生まれ、取引増加の機会が与えられる。

（但し、与えられるものは、取引増加の「機会」だけである）

＜理想面＞

ロータリー活動を通して、事業における高い倫理基準と正しい経営方法が体得できる。そして、個人生活、事業生活、社会生活など全ての場で実践すべき規範・手本でもあり、かつ職業倫理全般にも通じる「奉仕という生き方（ロータリーの理想）」を会員一人一人が学び合い、実践することで、事業が向上・発展する。

● ロータリーの応用（ロータリーの真髄）：クラブ会員の責務

第3. 会員の職種・業界全体の向上

第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

実は、上記の『ロータリーの応用（ロータリーの真髄）』の内容（← P9参照）である

* 「第3. 会員の職種・業界全体の向上」

* 「第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上」

の2つに、

* 「第2. ＜理想面＞ = 奉仕という生き方（ロータリーの理想）を事業に適応」を合わせた内容が、『決議 23-34（冒頭の文章）』

なのです。

すなわち、「第2. ＜理想面＞」に記されている

『奉仕という生き方（ロータリーの理想）』を

「第2」の事業の向上だけでなく、

「第3」の職種・業界全体の向上、

「第4」の家庭・町・州・国、ならびに社会全体の向上

にまで適応させるという内容が、『決議 23-34（冒頭の文章）』だということです。



ここで留意しておいて欲しいのは、右の文中にある「社会奉仕」という言葉です。

<決議 23-34（冒頭の文章）>

ロータリーにおいて社会奉仕とは、ロータリアンのすべてがその個人生活、事業生活、および社会生活に奉仕の理想を適用することを奨励、育成することである。

すなわち、『決議 23-34』が採択された1923年当時は、

『奉仕』＝ 家庭、クラブ、職場、業界、地域社会、州、国など、あらゆる場面や状況での奉仕であり、これら全体を呼称して「社会奉仕」とも表現する

ということであり、現在の「社会奉仕（＝ 地域社会奉仕）」とは区別が必要です。（← P4参照）

したがって、上記の『決議 23-34（冒頭の文章）』で使われている「社会奉仕」とは、あらゆる場面や状況での「奉仕」という意味であり、現在の「社会奉仕（＝ 地域社会奉仕）」という意味ではないのです。

そして、この『決議 23-34（冒頭の文章）』から、「社会奉仕」という言葉を外した内容が、「ロータリーの目的（第3）」に受け継がれたのです。

<ロータリーの目的（第3）>

ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること

以上が、本項目の冒頭で述べた「四つ目の注目すべき点」の解説です。（← P6 参照）

◎ 追記：ロータリーの基盤

ロータリーの「基本」、「応用」、「真髄」の3つについては、Guy Gundaker が既に明記しています（← P9、P40参照）。一方、本項目を熟読すると、ロータリーの「基盤」というものも見えてくるのではないのでしょうか。すなわち、

<ロータリーの基盤（the base of Rotary）>

ロータリーは、選ばれた異業種の仲間がロータリーの志を共にし、強め高め合いながら、立派なロータリアンに成るべく精進し合う。この「親睦」と「学び」こそが、「ロータリーの基盤（the base of Rotary）」である。

ロータリーが100年以上も発展し続けてきた理由は幾つもあるでしょうが、その1つは、この「ロータリーの基盤（the base of Rotary）」がしっかりしたものであったからだと思います。

いずれにしても、当時のロータリーの「一般奉仕概念」と「クラブ運営の在り方」を体系化し、史上初めてのロータリーの教科書・解説書として1916年に発行された「A Talking Knowledge of Rotary」は、Guy Gundaker 以降の、そして現代のロータリーの重要事項が満載です。まさに、

“Guy Gundaker の前に Guy Gundaker なく、
Guy Gundaker の後に Guy Gundaker なし”

では、ないでしょうか。

◎ 追記：ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割（具体例）

ここでは参考までに、Guy Gundaker のロータリー観に共感した私が、寒河江 RC の会長時代（2009～2010年）、どのようなクラブ運営を心がけていたかについて、下記の「会員一人一人の向上（ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割）」の5項目に関連した内容を具体的に述べさせていただきます。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第1. 会員一人一人の向上

＜ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割＞

- 1) 会員同士が事業経営上の経験を交換し合い、見識が広がるようにしてあげること
- 2) 会員の思考の幅を広げ、向上心を喚起させること
- 3) 奉仕の心を涵養せしめること
- 4) 自己発展の最大の可能性が得られるように支援すること
- 5) 優れた社会的指導者に育てること

第2. 会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）

第3. 会員の同業者・業界全体の向上

第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

先ず、私自身、クラブ会長として最も大切にしていた「信念」とも言うべきものは、“「**会員一人一人の向上**」（会員の質の強化）こそが、会員数の増加に繋がる。”であり、それだけに

“「**例会運営、会長挨拶、例会プログラム、委員会活動**」の4つの充実こそが**会員増強の極意であり、クラブ会長の最大責務である。**”

と、肝に銘じておりました。（→ P6、P7 参照）

そのためにも、上記の「1) 会員同士が事業経営上の経験を交換し合い、見識を広げる」例会を目指し、クラブ運営の重要項目の1つに「会員スピーチの充実」を掲げました。具体的には、「我が半生と仕事、ロータリーを語る」というテーマで、毎回2名ずつ（1人15分間）の会員スピーチ例会を年間9回行いました。そして、各々の会員から生い立ち、事業経営上の経験、人生観、ロータリー観を語ってもらい、会員間の敬愛の念とロータリー精神の熟成に努めました。

これ以外にも、ロータリーに精通したベテランのクラブ会員から、四大奉仕のフォーラム例会や特別月間例会などで基調講演（1人15～30分）をしてもらい、会員が壇上でスピーチする機会を例年以上に増やしました。実際、私の会長年度の例会では、クラブ会員（50名）のほぼ全員が、壇上でスピーチを経験したと思います。

一方、ゲストスピーチ例会は年間14回です。そのスピーチの内容は、行政、教育、金融、芸術、マスコミ、ロータリーなど多岐にわたりましたが、ゲストの人選には十分気を配り、「2) 会員の思考の幅を広げ、向上心を喚起させる」例会にも心がけました。

また、夜の例会は年間 13 回で、どれも飲食を含む懇親会をセットしました。ロータリー談義に花を咲かせながらの懇談の場は、まさにロータリーの志を深め合う親睦そのものであり、寒河江 RC の真骨頂です。

もちろん私自身も、毎回の会長スピーチに「命をかける」思いと努力で取り組み、毎週、ロータリーの矜持と喜びについて語り続けました。それだけに、私が最も気にしていたことは、例会終了後の

「今日の会長スピーチは、心が洗われた思いだよ」

「今日の例会プログラムは、とても良かったね」

などの、会員からの感想です。というのは、会長スピーチや例会プログラムの内容は、時間がたてば忘れられてしまいます。しかし、上記のような感想があったということは、少なくともその時は、会員の「2」向上心の喚起や「3」奉仕の心の涵養に繋がったはずだからです。



また、「4) 会員の自己発展」や「5) 指導者としての成長」という点では、入会数年以内の若い会員育成を主眼としたクラブ運営に力を入れました。なぜなら、それが若い会員の“質の強化”と“退会防止”、さらに若い世代の“会員増加”にも繋がると信じていたからです。

その1つの方策として、理事会メンバーの「老・壮・青」のバランスに気を配りながら、私は敢えて入会3～4年目の若い会員5名を理事に抜擢しました。もちろん、彼らの力量を見抜いた上での人選です。その上で、彼らの担当委員会の副委員長には、面倒見が良くて、ロータリーの造詣も深いベテラン会員に懇請しました。そして、その副委員長と理事・役員の全員が、一年間がっちりスクラムを組みながら、若い理事たちに思う存分の活躍をしてもらったのです。

実は、寒河江 RC では入会5～6年で理事を経験するのが慣例なので、当初は批判的な意見もありました。しかし、周囲からの助言や援助のおかげで、彼らの例会での報告や説明、計画や準備の確かさなどが次第に評価されるようになり、やがて批判の言葉を耳にすることはなくなりました。それは、彼らが地道にロータリーを学び、理解し、実践に繋げていった証拠でしょう。

もちろん、経験不足から多少の失敗もありましたが、それも貴重な経験です。委員会活動にしても、若い感覚と押しの強さで、例年以上の盛り上がりと成果を見せてくれました。こうして、入会3～4年目の若い理事5名は、1年間で大いに自信をつけ、大きく成長したのです。

その後は、彼らは毎年のように理事・役員に引っ張りだこで、最近では次々とクラブ幹事や会長を任せられています。また、地区の委員長として活躍している人もいます。もちろん、彼らの友人・知人が次々と寒河江 RC に入会してきたことは、言うまでもないでしょう。

いずれにしても、「会員一人一人の向上」とは、立派なロータリアンを育てるということであり、特に、若い有望な人材を育てることを強調したいと思います。それが会員増強に繋がり、クラブの発展にも繋がるからです。そのためには、「例会運営、会長挨拶、例会プログラム、委員会活動」の4つの充実が重要です。それだけに私は、「ロータリークラブの在るべき姿」が明確に記されている「A Talking Knowledge of Rotary」こそ、クラブ会長心得そのものだと思っています。

3. ロータリアンたる者、かくあるべし

私は、本項目の『ロータリアンたる者、かくあるべし』こそ、「A Talking Knowledge of Rotary」の最大の価値であり、その後のロータリーに多大な影響を残した所以だと思っています。それだけに、本項目を読むと、

「ロータリアンたる者、次の4つについて明確な回答を持ち、かつ、その自らの回答に相応しい実践をしなくてはならない」

という Guy Gundaker の強い意思を、私は感じるのです。



1. ロータリアンにとって「例会出席」とは？
2. ロータリアンにとって「活動」とは？
3. ロータリアンにとって「利益」とは？
4. ロータリアンにとって「究極の目的」とは？

本項目の内容は、ロータリー全般に及ぶので、他の項目と重複する点が少なくありません。ここでは、重複部分については簡単に記しながら、“ロータリアンたる者、かくあるべし”という Guy Gundaker の想い（気概）を中心に解説していきます。

【1】ロータリアンにとって「例会出席」とは？ ~~~~~

最初に、Guy Gundaker は

「ロータリーに、欠席は有りえない」

と強調しています。その上で、クラブ・リーダーは、ロータリーに入会が認められた者に対して

「名誉あるロータリアンという地位を引き受けた以上、ロータリーの全ての例会へ常に出席する義務を負う」

ことを、必ず告げなければならないと述べています。

また、ロータリー入会の条件としては、

＜ロータリー入会の条件＞

- ①事業の管理者であること。
- ②管理経営する事業所が、その職種・業界において指導的立場にあること。
- ③人柄が高潔で、誰からも信頼・信用されていて、社交性がある人物
- ④入会后、ロータリーに対する熱意を持つであろう人物
- ⑤入会后、ロータリーの会合に出席を欠かさないであろう人物
- ⑥入会后、ロータリアンとしての実践活動を怠らないであろう人物

を挙げながら、会員選考については、

「①②③について申し分ないことが、何よりも大切である」

とした上で、

「それに加えて、④⑤⑥の全てに十分な期待を持てる人物であることが必須である」

と述べています。

私は、上記の「ロータリー入会の条件」は実に良くできていると思います。当 2800 地区の伊藤巳規男パストガバナーは、

“ロータリアンになれる人にだけ、ロータリーへの入会を薦めなさい。”

が口癖です。それは、

“ロータリーへ入会する以上、①②③は当然だ。しかし、それだけではロータリアンにはなれません。④⑤⑥も確かな人こそ、ロータリアンになれる人なのです。”

という意味だそうです。伊藤巳規男パストガバナーの言葉は、蓋し名言です。

Guy Gundaker は、特に⑤の「入会后、ロータリーの会合に出席を欠かさないであろう人物」について、

“ロータリー入会后、例会欠席が多い会員に対しては、罷免など、厳しい断固とした措置をとるべきである。それは、欠勤が多い社員を解雇するのと同じことである。”と述べています。まさに、Guy Gundaker のロータリーに対する強い思い入れを感じさせる言葉です。彼は、その上で、

「出席率が高く、退会しない会員こそ、クラブの大きな財産である。入会・退会が（転職や退職以外の理由で）毎年のように繰り返されるクラブは、衰退する運命にある」と強調しています。日本のクラブでは、罷免は大袈裟と思う人が多いでしょうから、私としては「例会に欠席が多そうな会員は、クラブを衰退させるので、入会させてはならない」と言い換えて、皆様にお伝えしておきたいと思います。

なお、⑥の「ロータリアンとしての実践活動」についてですが、その内容は以下の項目で詳しく説明します。

【2】ロータリアンにとって「活動」とは？ ~~~~~

Guy Gundaker は、

“ロータリアンの種類は1つしかない。それは、次の4つの活動を積極的に行なう active Rotarian だけである。”

と述べています。

＜ロータリアンとしての活動 (active Rotarian) ＞

- ①個人としての活動
- ②ロータリークラブにおける活動
- ③同業者の団体における活動
- ④公共的かつ慈善的奉仕

①個人としての活動

Guy Gundaker は、①の「個人としての活動」について、次のように述べています。

「ロータリアンの個人としての活動」とは、

ロータリーが説く高い倫理基準と様々な奉仕を、ロータリーの理想と実践という目標を念頭に置きながら、自己の事業や専門職務において実践することである。

Members should carry into effect, in their own business or professions, the high standards and many sided service which Rotary teaches, keeping constantly in mind the goal — Rotarians' ideals and practices, one and indivisible !

上記の内容は、

「**ロータリアン個人としての活動**」= 自己の事業や専門職務において実践する『**職業奉仕**』
ということです。すなわち、決して、プライベートな活動という意味ではないのです。

さらに、Guy Gundaker は

“**ロータリーとは、自分自身を、事業を、職種・業界を、そして社会を向上させるという
「向上運動」以外の何物でもない。**”（← 下記の第1～4参照）

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第1. 会員一人一人の向上

第2. 会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）

第3. 会員の職種・業界全体の向上

第4. 会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

と述べ、

“その向上の成否は、ロータリアンの個人としての活動（職業奉仕）にかかっている。
すなわち、『**道徳律（職業倫理訓）**』に記されたロータリーの諸原則を、自己の事業や
専門職務において、ロータリアン一人一人がどこまで実践するかにかかっている。
だからこそ、**ロータリアン個人の活動（職業奉仕）こそ、最も重要なのである。**”

と明記しています。その上で、

“ロータリアンは安心して取引のできる人物であることを、世に知らしめるべきである。”

と述べ、だからこそ、

“**全てのロータリアンは、信頼と奉仕の象徴として、常に
ロータリーのバッジをつけなければならない。**”

と強調しているのです。



②ロータリークラブにおける活動

Guy Gundaker は、ロータリアンにとって、

「**ロータリークラブにおける活動は、個人の活動に次いで、二番目に重要である**」

と述べた上で、

“ロータリアンは、例会で提起される全ての問題について積極的に討論しなければ
ならない。さらに、自らの事業または専門職務について話す機会が提供されなければ
ならない。例え、昼食や晚餐の場であっても、意見の交換は行われなければならない。
なぜなら、ロータリアンが集う会合は、職業を異にする者から有用な情報が得られたり、
困難な問題に対して別な角度から解決の糸口がもたらされたりするからである。”

と説明しています。要するに、

「**ロータリークラブにおけるロータリアンの活動とは、
例会において、会員同士が討論、情報交換、意見交換をすること**」

という意味なのです。

これに関連して、Guy Gundaker は

“一業種一会員制のおかげで、ロータリアン同士の話し合いは、他の実業家同士が意見の交換をする場合よりも、安心して打ち解け合った雰囲気となるだろう。”と述べています。つまり、

“この一業種一会員制がもたらす会員同士の信頼や敬愛の繋がりの中、自分の仕事に参考となる意見や情報をより得やすいというメリットを、十分に活かすべきである。”というのが、Guy Gundaker の考え方なのです。それだけに、彼は「ロータリー運動におけるクラブの価値は、ロータリアンがクラブの例会にどのくらい積極的に出席するかにかかっている」と述べ、「例会出席」の重要性を強調しているのです。



高度情報社会と言われる現代社会では、Guy Gundaker が活躍した100年前のロータリー草創期に比べれば、例会で自分の仕事に役立つ意見や情報が得やすいという利点は少ないかも知れません。

しかし、地域を代表する、かつ功成り名を遂げ、奉仕の精神に満ちたロータリアンが集う例会では、互いの話を通して自分の事業訓や生活信条、人生観に良い影響をもたらす機会は多いはずで、実際、そういう機会を通じて、少なくとも私は人間的にも成長させてもらいました。まさに、「ロータリーは、人生を豊かにする」と思うのです。(← P17 参照)

私は、例会の中で、会員同士が胸襟を開いて真摯に語り合う時間をもっと設けるべきだと思います。ロータリー章典にも、

「ロータリークラブは、クラブ用務、活動、クラブ行事について、討議のための例会を定期的に開くように奨励される」と記されています。

例えば、クラブ協議会、特別なテーマでのクラブ・フォーラム、周年事業のための討論会なども、これにあたります。皆さんのクラブでは、こうした討議のための例会は、定期的に行われているのでしょうか？

③ 同業者の団体における活動

Guy Gundaker は、

「ロータリアンが同業者団体（業界）の会合に出席するということは、ロータリーがその業界へロータリーの大使（メッセンジャー）を派遣したという意味であり、ロータリアンは、当然、その大使としての『役割』を果たさなければならない」と述べています。その『役割』とは、

「同業者にロータリーの原理と理想を説き、職業倫理の価値と利他主義の精神を伝えるとともに、業界における低次元の考え方や悪しき商習慣を終わらせること」です。

要するに、『同業者の団体におけるロータリアンの活動』とは、

「ロータリーからの大使として、高い職業倫理基準と奉仕理念を業界に広め、
その業界をより良くしていく」

ということです。この考え方は、Guy Gundaker のロータリー観における大きな特徴の一つでもあります。

なお、ここの『③同業者の団体における活動』については、『2) ロータリークラブの構成と目的 【3】 第3「会員の職種・業界全体の向上」』（← P10 参照）および『5) 自己の職業分野と社会に対するロータリアンの義務と責任 【2】 自己の職業分野に対する「ロータリアンの義務と責任」』（← P40 参照）でも述べられていますので、ご参照ください。

④ 公共的かつ慈善的奉仕

Guy Gundaker は、

“ロータリーは、会員をより良き市民に、同業者団体のより良きメンバーに成長させるための訓練の場である。したがって、ロータリアンは、その地域社会、業界、そして所属する公共的な慈善団体において、積極的に価値ある行動をしなければならない。”

と述べています。



要するに、ロータリーの教育的性格（訓練）を強調した上で、（← P14 参照）

「入りて学び（→訓練の場）、出でて奉仕（→積極的に価値ある貢献）」

を説いているのです。

なお、上記の「地域社会において、業界において、そして公共的な慈善団体において、積極的に価値ある行動」という考え方は、1923年の『決議 23-34（冒頭の文章）』、さらに現在の『ロータリーの目的（第3）』に繋がるものです。（← P16 参照）

＜決議 23-34（冒頭の文章）＞

ロータリーにおいて社会奉仕とは、ロータリアンのすべてがその個人生活、事業生活、および社会生活に奉仕の理想を適用することを奨励、育成することである。

＜ロータリーの目的（第3）＞

ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を实践すること

このように、Guy Gundaker の想い（気概）は、今も綿々と生き続けているのです。

【3】 ロータリアンにとって「利益」とは？ ~~~~~

さて、前述のロータリアンとしての4つの活動、すなわち

- | | |
|-----------------------------------|-----------------|
| <ロータリアンとしての活動 (active Rotarian) > | |
| ①個人としての活動 | ②ロータリークラブにおける活動 |
| ③同業者の団体における活動 | ④公共的かつ慈善的奉仕 |

の成果として、ロータリアンはどのような利益を得るのでしょうか？

この問いに対して、Guy Gundaker は

「それは、商品の生産原価と販売価格との差額から生ずる利益のような、ちっぽけな物ではない」

と述べた上で、

「ロータリアンの利益とは、より立派で、より心の大きな人間となって、自分自身に対しても、同僚のロータリアンに対しても、そして社会全体に対しても、より素晴らしい奉仕を提供する機会が与えられることである」

と明記しているのです。その上で、彼は

「Service, Not Self」と「He Profits Most Who Serves Best」というロータリーの二つの標語 (Motto) を掲げています。

(なお、現在のロータリーの標語は、前者については「Service Above Self」に、後者については「One Profits Most Who Serves Best」に変更されています。)

ところが、この二つの標語について、Guy Gundaker は何ら解説や意見を述べてはいません。私見ですが、この二つの標語に、彼は少なからず違和感を抱いていたのではないのでしょうか。

先ず「Service, Not Self」ですが、これは Benjamin Frank Collins の言葉です。その解釈については諸説ありますが、少なくとも Guy Gundaker は「Not Self」一辺倒ではなく、「Self」を決して否定してはいないのです。むしろ彼は、ロータリアンとしての活動 (奉仕) から得られる「利益」は、ロータリアン自身に属するもの (Self) であることを強調しています。すなわち、ロータリアンの利益とは「より立派で、より大きな人間となること」であり、かつ「より素晴らしい奉仕を提供できる人間となること」であるとして、“人間性の向上” (Self) という利益を謳っているのです。言い換えれば、「Service, Not Self」ではなく、「Service For Self」という一面を強調しているのが、Guy Gundaker の考え方なのです。



次に、「He Profits Most Who Serves Best」ですが、これは Arthur Frederick Sheldon の言葉です。Sheldon の奉仕理論は「自らの事業を継続的に発展させるための学問的な企業経営の理念と実践方法」であり、あくまで“経営上の利益”を重視しています。それに対して Guy Gundaker は、「ロータリアンの利益というのは、商品の生産原価と販売価格との差額から生ずる利益のような、ちっぽけな物ではない」として“経営上の利益”を一蹴した上で、上記のように“人間性の向上” (Self) という利益を強く謳っているのです。

実際、次の『【4】 ロータリーの「究極の目的」とは?』で、彼は

“人間性の向上”という成長を通じて、“素晴らしい真のロータリアン”になることを最も重要視しています。もしかしたら、Guy Gundaker 自身は、ロータリーの二つの標語 (Motto) を快く思っていなかったのかも知れません。

【4】 ロータリーの「究極の目的」とは? ~~~~~

Guy Gundaker は、

“ロータリーは、人間の内面の体質を改善する。すなわち、ロータリーの中で体験を積み、成長することによって、素晴らしい真のロータリアンになっていくのだ。”

と述べています。

そして、そのロータリアンの成長過程の例え話として、作家 Nathaniel Hawthorne による素晴らしい物語「Great Stone Face」を紹介しています。ここでは、その物語の内容については割愛しますが、結論としては、

「我々がロータリアンとして深い思索、研究、奉仕の実践、差別なき友愛に満ちた交友に明け暮れば、“人としての成長は、必ず顔に現れる”という言葉の如く、やがて素晴らしい真のロータリアンの顔になっていくのです」

と述べているのです。

さらに Guy Gundaker は、

“真のロータリアンになろうとする人達は、THE ROTARIAN 誌、各クラブの出版物、国際ロータリー定款、道德律、ロータリーの目的（綱領）などを真摯に熟読しなければならない。そして、差別なき友愛に満ちた交友に没頭し、事業経営理論を身につけるために、成長（向上）という名の努力を惜しんではならない。”

と、ロータリアンが怠惰に向かわないように戒めています。

そして本項目の結びの言葉として、彼は

“全てのロータリアンよ！
ひたむきにロータリーを見つめよう！
あるべき事業経営の真髓を求めて研究しよう！
我々の生活を奉仕に満ちた貴重な時間で満たそう！
そして、我々の心を差別なき友愛心で満たそう！”

と謳い上げた上で、そうすれば、

“見よ、あの素晴らしきロータリアンを！”

と、世間は称賛してくれるだろうと述べているのです。



このように、Guy Gundaker にとって

“「ロータリーの究極の目的」とは、ロータリアンを世間から信頼され、尊敬される「素晴らしい真のロータリアン」に育てること。(Evolution of Members of Rotary Clubs into Real Rotarians)”

だったのです。

ここまで本書を読み進めてこられた皆様には、現在の「ロータリーの目的」を再度じっくり読んでもらい、その内容を短い言葉で述べるとすれば、どういう表現になるかを考えていただけたら幸いです。

＜ロータリーの目的＞

ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。具体的には、次の各項を奨励することにある：

- 第1 知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること；
- 第2 職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること；
- 第3 ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を实践すること；
- 第4 奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。

Guy Gundaker を信奉する私としては、現在の「ロータリーの目的」を短い言葉で述べるとすれば、

“世間から信頼され、尊敬される「素晴らしい真のロータリアン」になろう！”
だと思っています。

言い換えれば、「素晴らしい真のロータリアン」の具体的な姿が、「ロータリーの目的」に記されているということです。

私は、Guy Gundaker が大好きです。
まさに今、私が Guy Gundaker に贈りたい言葉は、

“見よ、あの素晴らしきロータリアンを！”

4. 会員に対するロータリークラブの義務と責任



本項目は、「クラブ奉仕」の在るべき姿を述べたものと言ってよいでしょう。当然、ロータリーの親睦、例会、各種行事などが主たる内容ですが、それらを計画立案して実施する委員会、理事会、特に会長の義務と責任の重さを強調していることが大きな特徴です。Guy Gundaker は、

“クラブ行事、特に例会の充実こそが、「ロータリーと社会の発展」に繋がる。
そして、その責任者はクラブ会長である。”

と考えているのです。別な言い方をすれば、

“クラブ行事、特に例会の充実を疎かにしたまま、「社会の発展」を目指す奉仕団体に徹すれば、
やがて「ロータリー」は衰退する。それだけに、クラブ会長のリーダーシップが重要である。
ということです。

【1】クラブの「問題点の発見」と「改善」~~~~~

Guy Gundaker は、本項目の冒頭で

“ロータリークラブは、クラブや会員の現状を省察し、どうすれば理想的なクラブに
発展するかを考えなければならない。”

と述べています。要するに、

“現状に満足せず、むしろ現状の問題点を見つけ出し、かつ改善していくことこそ
「会員に対するロータリークラブの義務と責任」である。ロータリーが掲げる理想を
達成するには、こうした不断の努力がクラブ・リーダーに必要なのである。”

と明記しているのです。ここで言う「クラブ・リーダー」とはクラブ理事のことですが、特に
クラブ会長を含めたクラブ役員の責務が大きいことを、本項の追記で解説します。(←P37 参照)

21 世紀に入って、戦略委員会などの重要性が話題になっていますが、クラブの「問題点の発見」と「改善」はクラブの義務と責任であることを、彼は 100 年以上前から強調していたのです。

【2】「親睦 (fellowship)」の正しい意味~~~~~

Guy Gundaker は、クラブや会員の現状における問題点になりやすいものとして、「親睦」を取り上げています。すなわち、会員同士の親睦を重要視するあまり、「ロータリーの良き親睦こそが、ロータリーの全てである」という考えを持つ人が少なくないことを問題視したのです。

Guy Gundaker の「親睦 (fellowship)」に対する考え方は、

“ロータリーという苗木が成長するために、その根に栄養を
与えてくれる土壌が「ロータリーの親睦」である。”

というものです。言い換えれば、

“ロータリーでは、『親睦』は必要で重要だが、目的ではない。”
ということです。



では、ロータリーという苗木が成長するための土壌「ロータリーの親睦 (fellowship)」とは、具体的にどういうものでしょう。以下、Guy Gundaker の考え方を踏まえながら、(日本人が誤解しやすい?)「ロータリーの親睦」の中身について説明します。

ロータリーの親睦 (fellowship) を正しく理解するには、以下に記した “acquaintance” と “friendship” と “fellowship” の違いを知っておかなくてはなりません。

- “acquaintance” (知り合い程度の交友)
- “friendship” = 「親しい者同士の友情」
(目的や理念には関係なく、親しい友人の間柄で使われる言葉)
- “fellowship” = 「志が同じ者同士の仲間意識」
(チームや組織、団体など、目的や理念が同じ者同士の間柄で使われる言葉)

上記を読めば分かるように、ロータリーは「誰もが同じ目的と理念を持つ組織」ですから、その会員であるロータリアン同士の間柄は、“acquaintance” や “friendship” ではなく、“fellowship”であることは明白です。すなわち、

“ロータリーの親睦 (fellowship) とは、ロータリーの志を共にする者同士の仲間意識”
なのです。したがって、前述した Guy Gundaker の親睦に対する考え方は、

“ロータリーという苗木が立派に成長していくためには、
「ロータリーの志を共にする者同士の仲間意識」を強め高め合う “親睦” という
栄養に満ちた土壌が必要である。”

というように理解すればよいでしょう。

次に、ロータリーの親睦 (fellowship) を育む『場』、すなわち、「ロータリーの志を共にする仲間意識」を強め高め合う『場』について考えてみましょう。もちろん、そういう『場』としては、ロータリーの『例会』を真っ先に挙げなくてはなりません。他にも、近隣クラブとの合同例会、IM、PETS、地区研修・協議会、地区セミナー、地区大会、さらにはロータリー研究会、GETS、国際協議会、国際大会などもあてはまります。また、「ロータリーの目的」唱和、「ロータリーソング」合唱、奉仕プロジェクトなどの委員会活動、飲食を伴うロータリーの酒宴の席なども、親睦を育む「場」に含まれると言ってもよいでしょう。要するに、

「親睦を育む場とは、ロータリアンが出会い集う場の全て」
なのです。

ここで、「ロータリーの親睦 (fellowship)」についてまとめておきます。

<ロータリーの親睦 (fellowship) >

ロータリーでは、**ロータリアンが出会い集う全ての場 (親睦を育む場)**を通じて、
ロータリアン同士の付き合いを

- “acquaintance” (知り合い程度の交友)
- “friendship” (親しい者同士の友情)
- “fellowship” (ロータリーの志を共にする仲間意識)

へと押し進めると同時に、

“fellowship” をさらに強め高め合っていくこと
で、栄養に満ちた “親睦” という土壌が醸成していく。

これによって、**ロータリーという苗木が立派に成長していくのである。**



さて、Guy Gundaker は、良き親睦を作り出すものとして、以下の7つを挙げています。

＜ロータリーの良き親睦を作り出すもの＞

1. 心のこもった握手
2. 姓ではなく、名前で呼び合うこと
3. 歌の合唱を行うこと
4. その人らしいウィットやユーモアに富む言動
5. 会員間の思いやり、親切な行為
6. (議長、会員、招待者などに対する) 礼儀正しさ
7. 成熟した実業家たるロータリアンに相応しい紳士の振舞いと思慮深さ

Good fellowship is evidenced by:

1. *The hearty hand-shake.*
2. *The first-name acquaintance.*
3. *Chorus singing.*
4. *“Stunts” of a certain character.*
5. *Other kindnesses shown by members to each other.*
6. *Courtesy exhibited to presiding officers, fellow members and guests.*
7. *The gentlemanly demeanor and the thoughtfulness which characterize the mature business-man.*

上記の1～4は米国らしさを感じさせますが、5～7は万国共通の必須事項と言ってもよいでしょう。なお、「4. ウィットやユーモアに富む言動 (“Stunts” of a certain character)」の意味は、ウィットやユーモアを交えながら、相手に自らの良い人柄を印象づけ、好意を抱かせるような言動を心かけるということでしょう。これは、日本人には少し難しいかも知れませんね。

もう一つ、私としては、Guy Gundaker が上記5～7で言及している内容に関連して、
「ロータリアンは、他人の悪口や陰口を言ってはならない」
ということ、敢えて強調しておきたいと思います。

もちろん、意見を述べるのは大いに結構です。しかし、他人の悪口や陰口を言っては駄目です。そういう人は、例外なく嫌われ、疎んじられ、やがては軽蔑されていくからです。

それが社会的に地位や役職の高い人だとしたら、周囲には「面従腹背」の者しかいなくなるでしょう。また、それがロータリアンだったら、ロータリーの「親睦」を台無しにする人物と言ってもよいでしょう。当然、それは上記5～7の精神に違反しますし、周囲から信頼され、尊敬される「素晴らしい真のロータリアン」になれるはずがありません。

これまで私は、信頼と尊敬に値する、素晴らしい真のロータリアンにたくさん出会いました。もちろん、経歴や考え方、性格などは人それぞれです。しかし、共通点が1つあります。それは、**「意見は言っても、他人の悪口や陰口は決して言わない人」**です。

【3】「例会」や「行事」の在り方 ~~~~~

Guy Gundaker は、ロータリーの例会について

「**会員の入会・退会の入れ替わりが相次ぐようでは、例会に魅力や価値がない証拠である**」
と述べています。私としては、

「**例会に欠席者が多いようでは、例会に魅力や価値がない証拠である**」
と言いたいところです。この意味は、本項目の最後「追記」で詳述します。（← P36参照）

一方、クラブの行事については、

「**娯楽的な内容のものよりも教育的、経営的観点からの内容を優先させるべきである**」
と述べています。もちろん、

「**旅行会、演奏会、家族会などの娯楽的行事があってもよいが、それらの内容は、あくまでロータリークラブの行事として妥当なものであるべき**」
というのが彼の考えです。

要するに、Guy Gundaker は、ロータリーの限りある少ない時間（例会や行事）を魅力的で価値あるものにするよう、強く求めているのです。実際、彼は

「**ロータリーの高邁な理想を実現させていくには、与えられた時間は如何に少ないかを考慮すべきである**」
と述べています。

最近、「ロータリーの例会は毎週ではなく、月2回の開催でもよい」というクラブ細則が可能になりましたが、これを聞いた Guy Gundaker は大いに嘆くことでしょう。

① 例会全般について

Guy Gundaker は、クラブの例会を最も重視しています。そして、

“**例会は、クラブ会員の向上、会員の事業の向上、そして『ロータリーの目的』実現のために、最大限に活用する場である。その実現は、クラブ会長の責任である。**”
強調しているのです。

●プログラム委員会、理事会、会長の責任

そのためには、例会行事そのものが有意義であることはもちろんですが、時間配分や順序にも留意しながら、なるべく多くの会員がクラブの一体感を感じられるような企画（例えば、『ロータリーの目的』唱和、『ロータリー・ソング』合唱、会員の表彰、会員またはゲストによるスピーチ、ロータリーの研修、テーブル・ディスカッションなど）を心がけるのが、「プログラム委員会」の役割であると述べています。

言うまでもなく、それら「プログラム委員会」による企画運営については、会員相互のロータリーの志を共にする仲間意識を強め高め合う「親睦委員会」、公共福祉の問題を担当する「公共問題担当委員会」（現在の社会奉仕委員会）などと協力しながら、会長と事前に十分な検討をしておく必要があります。

それだけに、例会プログラムの年間スケジュールを計画立案する年度当初の理事会は、極めて重要です。なぜなら、例会プログラムの年間計画の立案が、

●RIの年度テーマ、地区目標、クラブ会長方針などの実現・達成に、果たして役立つものとなっているのか？

●会員自身の向上や会員の事業向上にとって、有意義な例会内容と言えるのか？

について、十分な審議が必要だからです。

もちろん、その例会プログラムを実施する場合は、その例会の前々月および前月の理事会も極めて大切です。予算や準備、役割分担など、具体的な内容について詳細に審議・決定しなくてはなりません。



Guy Gundaker は、そうした計画立案や審議の流れの中で、

「クラブ会長は、強力なリーダーシップをしっかりと発揮する責務がある」

と強調しています。彼は、

「理事が無関心であるからとか、委員が積極的でないからとかを理由に、会長はこの責務から免れることはできない」

とまで言っているのです。

② 昼食例会について

Guy Gundaker は、

“通常1時間の昼食例会のうち、最初の半分は食事と親睦に使われる。したがって、単純計算で年間52時間の昼食例会があるとすれば、ロータリーの理想実現のために最大限に活用できる時間は、例会後半の僅か26時間しかないのである。”
と述べ、限りある少ない例会時間を有意義なものにすることを強く求めています。

●会員の未知の能力を引き出し、かつ会員同士が理解を深め合う例会

「限りある少ない例会時間を有意義なものにするには、会員の未知の能力を引き出し、かつ会員同士の理解にも繋がる例会であることが重要である」

このように Guy Gundaker は述べた上で、昼食会後半の年間26時間しかない行事に「卓話プログラム」を行うのは有効・効率的であり、その場合、クラブ・リーダーは以下の内容を考慮すべきであると強調しています。

* クラブ会員またはゲストスピーカーによる卓話プログラム

Guy Gundaker は、クラブ会員やゲストスピーカーが自分の仕事について語る例会卓話の重要性について、次のように述べています。

“ゲストスピーカーのスピーチは、会員にとって有益であることは言うまでもない。しかし、クラブ会員のスピーチは、それ以上に有益であり、それを聴ける機会こそクラブ会員の大きな特権の1つである。なぜなら、スピーチを任せられたクラブ会員は、同業者の存在を気にすることがないだけに、正直に真実を語る事ができるし、会員に役立つことを大いに教えることができるからである。”

* ロータリーを学ぶための卓話プログラム

Guy Gundaker は、ロータリーの理解を深めること（ロータリー研修）だけを目的とした「特別昼食会」の重要性も説明しています。すなわち、少なくとも6週間に1回は「特別昼食会」を開き、ロータリー情報委員会が担当した上で、ロータリーの原理について再検討し、深め合う卓話プログラムを求めているのです。その際、司会者を交代制にしたり、意見交換会をしたりなど、色々な人に発言させることで会員の成長を促すことも推奨しています。また、近隣のクラブとスピーカーを交換して開催することも推奨しています。

前述のように（← P18 参照）、私のクラブ会長時代、「我が半生と仕事、ロータリーを語る」というテーマで、毎回2名ずつ（1人15分間）の会員スピーチ例会を年間9回行いました。また、同じテーマで、近隣クラブとも会長交換スピーチを行いました。それらは、親睦と敬愛の念を深め合っただけではなく、仕事やロータリー・ライフにも役立つことばかりで、どれもが充実した例会だったと思います。皆さんのクラブでも、ぜひ試みてください。

● 会員の心に、最高の職業倫理基準を植え付ける例会

Guy Gundaker は、例会で道徳律（職業倫理訓）を唱和したり、解説したりする機会を設けるように推奨しています。今で言えば、「四つのテスト」や「ロータリーの目的」を皆で唱和したりすることに相当します。もちろん、唱和だけではなく、時には「四つのテスト」や「ロータリーの目的」を解説するような機会も設けるべきでしょう。

● 奉仕の扉を開く例会

Guy Gundaker が残した数多くの名言の1つに、

「ロータリアンは、奉仕能力の涵養を切望し、かつ奉仕に専念する人である」

というのがあります。これは、「ロータリアンは、ロータリーの原理を体得するにつれて奉仕能力が向上するだけでなく、進んで奉仕したいという意欲が湧き上がり、奉仕に身を捧げるようになる」という意味です。その上で、「奉仕とは、奉仕すべき『事』と『人』とを行動に結びつけようとする心の過程である」と述べています。すなわち、それが「奉仕を実践したいという『利他の心』の現れ」だということです。

だからこそ例会は、会員が奉仕の心を学び、理解し、価値ある実践に繋げていけるよう、奉仕の意欲を湧き立てていく場でなくてはならないということです。それが、Guy Gundaker の言う「奉仕の扉を開く例会」という意味なのです。

最後に彼は、「専門職務（医師、歯科医師、弁護士、広告ライターなど）に比べれば、企業主の奉仕の実践は大変である」ことを次のように述べて、企業主を鼓舞しています。

“専門職務に従事するロータリアンは、個人差はあっても、普段から奉仕の実践をしていると言ってよいでしょう。しかし、同じロータリアンでも、従業員を多くかかえる企業主は、全ての従業員に奉仕の心を植え付けなければ、奉仕の実践をしているとは言えません。何度も何度も繰り返し、植え付けていくしかないのです。”

●会員の事業に助力を与える例会

Guy Gundaker は、「どんなクラブ（教育、人間性向上、健康増進、社交など）であろうと、同じ組織に属する者同士、商取引の機会はあるだろう」と述べています。しかし、

「ロータリーでは、会員であるという理由だけで、商取引が増えるなどと考えるはいけなくと戒めています。その一方、

「例会は、親しみと友情の種が蒔かれ、それが育つ場である。その種は、食事を共にするロータリーの例会では、すくすくと育ちやすい。そこに信頼と誠実に基づく真の友情が芽生えれば、商取引が増えるのは当然である」

とも述べているのです。すなわち、例会が真の友情の芽生える場であれば、当然、会員の事業に助力を与えることにもなるというのが、Guy Gundaker の考えです。（← P9 参照）

例えば、クラブ入会の勧誘の際、

“ロータリークラブに入会すれば、それで商取引に繋がるなどと思ってはいけません。しかし、入会して例会出席に励み、交友やロータリー活動を通じて君の素晴らしさを会員の誰もが分かるようになり、そこに信頼と誠実に満ちた友情が芽生えれば、自然と商取引は増えるだろう。要は、君次第だ。”

と述べるのは、大いに結構だということです。（← p8、p43も参照）

要するに、ロータリアン同士の取引というのは、奉仕の心を互いに学び実践し、信頼と誠実に満ちた人間性、そして、そこに育まれる友情の『結果』だということです。

だからこそ、当地区の伊藤巳規男パストガバナーの言葉、

「ロータリアンになれる人にだけ、ロータリーへの入会を薦めなさい」（← P21 参照）は、蓋し名言なのです。

③ 夕刻の例会について

Guy Gundaker は、

「夕刻の例会は、昼食例会より長い時間がとれるので、個々の会員の向上と個々の会員の事業の向上を達成するには、なおさら良い機会である」



と述べた上で、夕刻のプログラムは、より精選された素晴らしい話を中心にして構成するように推奨しています。それだけにロータリアンは、次の言葉を肝に銘じて欲しいと思います。

「夕刻の例会で、行事や議事、プログラムなどをなおざりにして、早めに懇親会へ移行しようというような不埒な考えを、ロータリアンたる者、決して抱いてはなりません」

彼は、夕刻の例会にふさわしい多数のプログラムを調べた結果として、企業の実績に関する話題、事務機器やファッションに関する話題、都市生活の話題、公共問題の検討などが重要視されていると報告しています。その上で、ロータリーは事業経営者の議会のようなものであるのだから、行事や議事を迅速に進行するのはよいとしても、提案された問題を慎重に審議すること、充実したプログラムを満喫することなどを、心がけなければならないと述べています。

それ以外にも、近隣のクラブ同士の訪問、祝祭日の記念祝典なども重要視されていると報告しています。さらに、通常12月に行われる家族例会はクリスマスを祝した慈善活動事業の一部となっていること、ロータリー創立記念例会はロータリーの話、またはロータリアン同士の討論会として実施されていることなども報告しています。

また、新入会員の紹介は夕刻の例会で行うことを推奨した上で、

“会長は、新入会員にロータリーの話をするのが慣例となっている。これは、例会に参加している全会員に対して、ロータリーの理想を喚起する意味でも重要である。”と述べています。

私としては、新入会員を紹介する例会では、ロータリーに関する以下のような内容を、クラブ会長からぜひ話してあげて欲しいと思います。

<新入会員に伝えて欲しいこと>

- ロータリーは、「①ロータリアン同士の親睦を基盤に、②立派なロータリアンを育てながら、③価値ある奉仕を通じて社会に貢献する」世界的な団体です。もちろん、価値ある奉仕の中で最も重要なのは、職業奉仕です。
- 「ロータリーの親睦（fellowship）」とは、ロータリーという苗木が成長するために、その根に栄養を与えてくれる土壌のようなものです。「ロータリアン同士の親睦を基盤に」とは、そういう意味です。
- 「ロータリーの親睦（fellowship）」とは、ロータリーの志を共にする者同士の仲間意識を強め高め合うことです。それが、ロータリーの成長をもたらします。
- ロータリークラブは、「ロータリーの目的」の達成を目指す組織であり、会員自身の成長、しいては会員の事業の向上にも繋がるものです。さらに、多くの出合いや親睦、奉仕を通じて、会員の人生を豊かにしてくれます。
- 新入会員の素晴らしさをクラブ会員の誰もが理解し、かつ信頼と誠実に満ちた真の友情が芽生えれば、ロータリーは充実した人生を約束してくれるでしょう。私はクラブ会長として、新入会員のあなたに最大限の援助・貢献することを、皆の前で約束します。
- その他：「ロータリーの目的、ロータリーの標語、四つのテスト」などの意味

いずれにしても、ロータリークラブの全ての例会は、出席者が時間を割くに値する充実した内容でなければなりません。特に夕刻の例会では、

“会員がロータリーの高い理想と意欲に燃えて、「自分の仕事、自分の業界、自分の家庭、自分の町や州や国に対して優れた奉仕をしよう」という決意を新たにすることであって欲しい。”と、Guy Gundaker は強調しているのです。

◎ 追記：例会の大切さ

さて、ここまで解説してくると、Guy Gundaker が如何に「例会」を重要視していたかが、お分かりになったでしょう。ここでは、本項目の前半で以下のように記した“私の真意”について追記いたします。（← P31 参照）

Guy Gundaker は、ロータリーの例会について

「会員の入会・退会の入れ替わりが相次ぐようでは、例会に魅力や価値がない証拠である」と述べています。私としては、

「例会に欠席者が多いようでは、例会に魅力や価値がない証拠である」と言いたいところです。この意味は、本項目の解説を終えてから詳述します。

私自身、せっかくロータリーへ入会したのに1～2年で退会してしまう人に対しては、「ロータリーの素晴らしさを正しく理解できないうちに辞めてしまい、本当に残念だ」という気持ちでいっぱいになります。しかも、その退会理由が転勤・転居以外のものだった場合、

- 退会者に対して、“acquaintance”（知り合い）→ “friendship”（友情）→ “fellowship”（ロータリーの志を共にする仲間意識）という流れを、クラブとして上手く作ってあげられなかったのではないかと
- 退会者本人にとっては、魅力や価値が感じられない例会ばかりだったのでないか？

とってしまいますし、もちろん自分自身の配慮不足についても反省します。

実際、そういう人は、仕事の多忙を理由に、普段から例会に欠席することが多かったのではないのでしょうか。言うまでもなく、ロータリーの親睦を育むのに最も重要な場は「例会」です。その大事な「例会」に欠席ばかりしては、親睦どころか、疎外感すら感じるようになり、もちろん会費も無駄な出費とみなすようになって、結局は退会へと繋がってしまうでしょう。

それだけに、クラブ会長は、例会に欠席者が増えてきた場合、重大な危機感を持つべきです。クラブの会員は、誰もが仕事で忙しい中、時間を自己管理できる経営者であるからこそ、仕事をやりくりして例会に出席しています。それは、食事のためではなく、例会に身を置きたいと思う「何か」が十分にあるからです。だからこそクラブ会長には、その「何か」について、きちんと提供しているという認識と自負が必要です。その「何か」が十分でない例会であれば、当然、例会の欠席者は増えていくでしょう。だからこそ、クラブ会長は

「例会に欠席者が多いようでは、例会に魅力や価値がない証拠である」

という言葉で、普段の例会を省みて欲しいと思います。その上で、実際に問題があるとなれば、クラブ理事会で最重要課題として取り上げ、実効性のある対策を検討しなくてはなりません。



クラブ会長にとって、会員のロータリーに対する士気を高めるために、そして会長に対する信頼と敬愛の念を得るために、さらにクラブの活性化をもたらすために、最大の武器となるのは「会長スピーチ」です。それだけに、スピーチの内容はもちろん、話すスピード、抑揚、間、表情、ジェスチャーなどにも気を配り、毎回、心が洗われるような「会長スピーチ」をお願いします。

◎ 追記：充実したクラブ運営

ロータリアンからしばしば質問されることの一つに、

“クラブ・リーダーには、なぜ「役員」と「理事」の区別があるのですか？”

というのがあります。こういう質問があるのは、日本のロータリークラブでは、役員が集まってクラブ運営について検討する「役員会」が軽視されているからではないでしょうか。

確かに、国際ロータリー定款細則、標準クラブ定款、推奨クラブ細則、ロータリー章典のどれを読んでも、「理事会」については書いてありますが、「役員会」については書かれていません。しかし、Guy Gundaker の主張する「充実したクラブ運営」を実現するためには、役員が集まって検討する「役員会」は必要なのです。

ここでは、「A Talking Knowledge of Rotary」には書かれていませんが、Guy Gundaker の主張する「充実したクラブ運営」を、今の世の中で実現するために必要な知識と方法について追記いたします。

①役員と理事~~~~~

クラブの役員は「会長、直前会長、会長エレクト、幹事、会計、会場監督」で、クラブ細則によって、副会長も役員に含めることができます。会場監督以外の役員は、全員が理事会メンバーと規定されているので、理事を兼ねます。役員である会場監督は、クラブ細則によって理事（理事会メンバー）とするかどうかを定めます。

通常、会員数が多いクラブでは、クラブ細則で副会長は役員とされ、役員である会場監督は理事を兼ねると定めているでしょう。その場合、「会長、直前会長、会長エレクト、幹事、会計、会場監督、副会長」は、役員であると同時に理事も兼務し、理事役員と呼ばれます。

一方、役員を兼ねない理事は、クラブ管理運営委員長、公共イメージ委員長、財団委員長、奉仕プロジェクト委員長などの役職を担う場合が多いようです。

要するに、役員はクラブ運営の指導的役割を担うクラブ・リーダだということです。当然、理事会とは別に、「役員会」が必要です。

②役員会、理事会、幹事について~~~~~

役員会は、クラブの執行機関です。役員会は、理事会に諮る議案の内容（各委員会の活動計画、予算、実施内容、決算、新たな提案など）を事前に検討しておくことが求められます。そして、それらの議案を役員会でまとめ、必要な資料と一緒に理事会へ提出するのが幹事の仕事です。この場合、役員会の中心的役割を担うのは、（会長ではなく）幹事です。日本のロータリーでは、こうしたプロセスが軽視されているのではないのでしょうか。

一方、理事会はクラブの決議機関（意思決定機関）です。すなわち、クラブ運営についての全ての管理責任を負うのが理事会であり、だからこそ、構成メンバーには役員も加わるのです。もちろん、理事会の議長である会長といえども、理事会の決議に拘束されます。

理事会は、役員会から提出された議案を検討した上で、決議（承認・不承認・各種決定）を行います。理事は、それぞれ役割上の立場によって審議に臨む心構えや立場は異なりますが、理事会では活発な議論を行わなくてはなりません。そうした心がけや切磋琢磨が、ロータリーに対する見識を互いに深め合うことにもなるからです。効果的で価値あるクラブ運営ができるかどうかは、理事会メンバーの心意気と責任感、そしてロータリーに対する認識の深さにかかっていると云ってもよいでしょう。

理事会で事業の実施が決議されたからと言って、幹事は担当委員会に丸投げしてはいけません。それらの事業計画を検討・実施する担当委員会の活動状況を把握するとともに、その活動内容を理事会に報告する（または、指導・監督した上で報告させる）ことも幹事の役割・責任です。各事業の収支予算案や決算書の作成・提出についても、幹事は事前確認して指導するべきです。

幹事は、以上のことを熟知した上で、役員会での責務、理事会の準備、理事や各委員長への指導や気配りなどをこなしてゆくことが大切です。言い換えれば、「幹事はクラブの要」ということです。幹事はクラブ内、地区、R Iなどに対する事務的な処理をするのが仕事の大部分と思われがちですが、それらは幹事という立場上、当然付随する仕事の一部に過ぎません。

大事なことは、幹事はクラブ運営における執行面の代表役員（中心的役割を担う役員）として、例会や理事会、その他の諸活動が「ロータリーの目的」、「クラブ定款・細則」をはじめとしたロータリーのルールに沿って正しく行われているかどうかを見定め、かつ適切な指導と運営に心がける最高責任者であるということです。

最近、クラブ運営や諸活動を前例踏襲で安易にすまそうとする傾向がある中で、リーダーとしての指導性が希薄になり、自らの管理能力や気配り能力を高めることに消極的な理事・役員が少なくありません。そういう現況だからこそ、幹事のクラブ運営に取り組む真摯で誠実な姿勢、そして確実で献身的な仕事ぶりが重要なのではないのでしょうか。なぜなら、そうした幹事の姿こそが、後輩の育成、クラブの伝統に繋がるからです。幹事は、クラブの要なのです。

③委員会~~~~~

委員会は 会長の諮問機関であると同時に、事業の実施主体です。委員会は、会長の諮問により、クラブの目標と指針に沿った事業計画を策定し、それらの事業予算を立てます。もちろん、会長の年次目標や意向に基づく内容であるべきですが、それらの承認や決定には理事会の議決が必要です。

委員会の活動は、会員間の意志の疎通を図り、友情を深めるために最も良い機会です。少人数の会合の中、ロータリー情報や互いの意見が盛んに交わされることで親睦が深まっていくからです。それだけに、委員会の開催は会員宅で開催することが推奨されています（炉辺会）。そうすれば、親睦の度合いも一層深まりますし、家族にロータリーを理解してもらう最高のチャンスともなるからです。また、入会数年の会員に委員長を任せ、副委員長に面倒見の良いベテラン会員をあてるなど、リーダー育成にも配慮しましょう。それらを主導するのが会長で、陰で支えるのが幹事です。

③会長と幹事~~~~~

価値あるクラブ活動は、会長と幹事が「クラブ活動の目的（ロータリーの目的の推進・達成）を常に自覚しながら、システム化されたクラブ組織を適切に運営することによって成就します。したがって、価値ある例会の在りよう、役員会・理事会・委員会などの適切な準備と運営、事業の計画と進め方などについて、常に深謀遠慮と反省を繰り返し、より良きものにしていくことが必要です。もちろん、クラブ協議会、クラブ討論会、炉辺会、その他の伝統的習慣等についても、会長と幹事は書物を通して、また諸先輩との交流を通して理解・精通に心がけることが大切です。

会長にとって最も大きな仕事は、誰もが「今日も来てよかったと言ってくれる例会です。会長は、それに半ば命をかける気概があって欲しいと思います。それだけに、幹事はSAAや親睦委員と協力し、会員や来訪者への対応や食事の準備にも気を配らなくてはなりません。会長のスピーチや例会進行が不評な場合は、会員からの声を会長に意見・具申するのも幹事の重要な仕事です。



最近、例会の形骸化という言葉をしばしば耳にしますが、それはクラブの低迷を意味します。それだけに、クラブ活性化の最大の武器は「会長スピーチ」であることを銘記して欲しいと思います。（← P36 参照）

また、会長はクラブにおいても、地域社会に対しても、クラブを代表する象徴的な立場です。常に「奉仕理念（超我の奉仕）」の提唱に心掛け、実践にあたっては率先して先頭に立たなければなりません。

これに対して、幹事はクラブ運営を丁寧かつ確実に取り仕切る立場にあります。会費の督促、会報発行や例会出欠の管理、欠席が多い会員やルールを守らない会員への指導、活動の鈍い委員会への奮励喚起など、幹事は汚れ役、嫌われ役をこなさなくてはなりません。だからこそ幹事は、普段から、全ての会員に対して高潔で公平公正、気配りと思いやりのある対応を心がけることが何よりも大切です。

古い言葉ですが、「好漢（頼もしく感じのよい人）」と呼ばれるような人物こそ、幹事が目指して欲しい姿です。「役や立場が人を作る」という言葉がありますが、終わってみたら「好漢」に相応しい人になっていたなら、クラブ内で最高の評価を受けたと言ってよいでしょう。

5. 自己の職業分野と社会に対するロータリアンの義務と責任

ロータリーは、以下に掲げる点を最も重要視していることを、声高らかに表明する。

1. ロータリーの**会員そのもの**、そして会員自身が達成したいと望んでいる**理想**
2. 会員自身の職業における**価値**、そして会員の職業の有用性を広げていく**義務**
3. 会員自身が自己の職業分野（業界）において果たすべき**義務**
4. 会員自身が家庭、町、州、国において果たすべき**義務**

Rotary is the expression of man's belief—

1. *In himself and the ideals he hopes to achieve.*
2. *In the worthiness of his occupation, and his duty to widen its sphere of usefulness.*
3. *In the duty he owes to his own craft.*
4. *In the duty he owes to his home and his town, state or province and country.*

Guy Gundaker は、本項目の冒頭で上記のように述べ、ロータリーが最も重要視すべき4つの点を列記しました。言い換えれば、「この4つこそが、ロータリーの核心を表現したもの（Rotary is the expression of man's belief—1.2.3.4.）」ということです。そして、この4つのためにこそ、ロータリークラブは様々な活動を考え、実行しなければならないと述べています。

【1】ロータリーの基本と応用 ~~~~~

Guy Gundaker は、上記の1と2を『**ロータリーの基本 (Fundamental Rotary)**』と明記し、クラブ・リーダー（クラブ役員）が果たすべき重大な責務であると述べています。

「ロータリーの基本」とは、

1. 会員であるロータリアン自身の向上に関する諸活動（←上記の1）
2. 会員であるロータリアンの事業向上に関する諸活動（←上記の2）

(The betterment of the individual member and his business) を行うことである。

さらに、この「ロータリーの基本」と区別すべきものとして、上記の3と4に相当する『**ロータリーの応用 (Applied Rotary)**』というものがあり、

「ロータリーの応用」とは、

「ロータリーの基本」としての2つの諸活動（すなわち、ロータリアン自身の向上およびロータリアンの事業向上に関する諸活動）を十分に
行う時、当然、それに引き続いて生じてくるであろうクラブ会員の諸活動の
ことである。それは、「ロータリーの真髄」でもある。（←上記の3と4）

と述べ、この『**ロータリーの応用 (Applied Rotary)**』、すなわち『**ロータリーの真髄 (The essence of Rotary)**』の**実践 (Rotary - at - Work)**については、クラブ会員の責務であると明記しているのです。（← P9参照）



21世紀に入ってからは、「奉仕団体としてのロータリー」の価値ばかりが強調されるようになりました。実際、「ロータリーの基本は奉仕である」といった言葉を耳にすることも少なくありません。私は、それらを否定するつもりはありませんが、Guy Gundaker がクラブ・リーダーの重大な責務として明示した、

「ロータリーの基本 (Fundamental Rotary) とは、
ロータリアン自身の向上に関するクラブの諸活動、および
ロータリアンの事業向上に関するクラブの諸活動の2つである」

についても、大いに強調されるべきロータリーの価値だと思っています。

【2】自己の職業分野に対する「ロータリアンの義務と責任」~~~~~

ここは、本項目の冒頭で述べた「ロータリーの核心を表現した4つの点」のうち、

「3. 会員自身が自己の職業分野（業界）において果たすべき**義務**」

について述べたものです。内容的には、本書の『3) ロータリアンたる者、かくあるべし

【2】ロータリアンにとって「活動」とは？ ③同業者の団体における活動』（← P23参照）について、再度、Guy Gundaker が持論を大いに語ったものです。それだけに、他の項目に比べると饒舌、脱線気味で、少なからず難解な内容ですが、分かり易く整理して解説いたします。

① ロータリアンは、ロータリーから各々の業界に派遣した代表である

Guy Gundaker のロータリーに対する考え方で、大きな特徴と言うべきものに

ロータリアンは、業界の代表者ではない。ロータリーから各々の職種・業界に派遣された、ロータリークラブの代表者（大使）である。

があります。この考え方に基づいて、彼は

ロータリアンは、他の同業者にロータリーの原理と理想を説き、「職業倫理の価値」と「利他主義の精神」を伝える**義務**がある。そして、業界における低次元の考え方や悪しき商習慣を終わらせる**責任**がある。そして、その業界を向上・発展させていくことこそ、ロータリーにとって大きな奉仕の機会なのである。

と述べています。（← P 10、P23参照）

上記の内容は、もちろん現代にも通じることであり、むしろ大いに強調されるべきだと思います。汚職や改竄など、今でも悪しき習慣や因襲を糾弾される業界が少なからずあるからです。これに関連して、Guy Gundaker は

「自らの日常生活で、ロータリーの原則を実践に移さないロータリアンは、ロータリーの職業倫理の力強い先達（a forceful teacher of Rotary ethics）にはなれない」と述べています。要するに、

「**職業倫理を旨とするロータリアンは、先ず自らの日常でロータリーの原則を実践せよ**」ということです。私も、全く同感です。

その上で彼は、ロータリーの職業倫理の力強い先達であるロータリアンに対して、業界における具体的な活動として以下の内容を求めているのです。

ロータリアンは自己の職業分野の業界団体（地元レベル、州レベル、全国レベル）に所属する義務があり、その団体において以下の5つの活動を積極的に行うべきである。

1. 職業倫理の高い理想を志す者の考え方を支持し、同業者に指導すること
2. 同業者に奉仕の精神を植え付け、奨励すること
3. アイディアや経営方法の交換によって、同業者の事業の効率を高めること
4. 業界（自らが属する職種）の地位向上に努力すること
5. 同業者相互間および業界全体の利益のために、同業者と協力すること

First: Leading or supporting the thoughts of those present to high ideals in business morality.

Second: Stimulating service to their fellowmen.

Third: Increasing the efficiency of the craft by encouraging the exchange of ideas and business methods.

Fourth: Endeavoring to elevate the standing of the craft.

Fifth: Co-operating with their fellow craftsmen for the benefit of each and all.

② ロータリアンとは、本人と事業内容に絶大な信用がある人物である

Guy Gundaker は

“道徳律（職業倫理訓）の中でも触れられているが、強調しても強調し足りない重要なことは、「事業主本人および事業に対する信用の大切さ」である。”

と述べています。

この「信用の大切さ」こそ、Guy Gundaker のロータリーに対する考え方における、もう一つの大きな特徴と言ってよいでしょう。すなわち、

ロータリーの会員に選ばれるということは、
会員個人および会員の事業内容に絶大な信用があるということである。

実際、「ロータリアンは、安心して取引ができる人物である」ことの理由について、彼は「迅速で確実な取引を行うということで評判が良いからだけではなく、価格や性能の表示に偽りがない製品を提供することで評判が良いからだけではなく、公正で適切な取引を行うということで評判が良いからだけではなく、何と云っても、既にロータリアン（会員本人とその事業内容に絶大な信用がある人）だからだ」と述べた上で、

ロータリアンは、事業社会における最良の代表者である。
それだけに、その名に恥じないような生き方をしなくてはならない。

と強調しているのです。

これは、

“ロータリアンは、「ロータリークラブの会員であるというだけで、会員本人および会員の事業内容に絶大な信用がある」という幸せ（特権）を得るのだから、当然、ロータリアンとしての義務と責任を十分に果たさなくてはならない。”

という、Guy Gundaker 特有の考え方にも繋がるものです。

以上のことに関連して、Guy Gundaker はロータリアンの心構えとして、以下のように述べています。（← p8、p34参照）

“ロータリーへの入会が認められた日から、その新入会員には多くのロータリアンが保有している信用が前貸しされる（すなわち、ロータリーに入会すれば、それだけで信用される）。そして、その信用があるからこそ、ロータリアン同士の取引も始まる。このような便宜と信頼を受けた以上、新入会員には、前借りした「信用という名の負債」を速やかに返済すべき義務が生じるのである（すなわち、便宜と信頼という恩恵に報いなくてはならない = 信用に値する立派なロータリアンにならなくてはならない）。”

とした上で、

“ロータリアンたる者、自己の負債は速やかに返済しなければならない。さもなければ、ロータリアンがロータリーの名に恥じない如何なる行動をしても周囲から信用してもらえないし、いくら立派な職業倫理を掲げても、同業者はそれを受け入れよう（採用しよう）とはしないからである。”

③ 各業界における「職業倫理訓」作成の必要性

Guy Gundaker は、当時（20世紀初頭）の風潮について

“国民は、厳格で心の通った職業上の良心を業界に強く求めるようになった。”

と指摘しながら、

“全ての企業は、人類に奉仕しているという『**社会奉仕 (Social Service)**』の考え方を受け容れざるを得なくなった。すなわち、倫理と事業は融和しなければならないということであり、これは実業界の革命と言ってもよいだろう。”

と明記しているのです。

その上で、“実際に職業上の良心が急速に高まってきたことは、次のような言葉が（20世紀初頭の当時）流行していることから明らかである”と述べています。

* “信頼” は、賢い客の代名詞である

Treat the confiding and keen buyer alike.

* 真実と奉仕は事業成功のコツ

Truth and service are handmaidens of business success.

* 事業経営の根本原則は、競争から協調へ

Competition as a cardinal business principle has been succeeded by co-operation.

* “買い主は注意せよ” から “売り主は注意せよ” へ

“Let the seller beware.” succeeds the old rule “Let the buyer beware.”

さらに Guy Gundaker は、

“電話の普及などで、「文書による契約」から「口頭による取引」に変化してきた現在、あらゆる分野の業界において、高度に倫理性のある職業倫理基準の作成と徹底が必要である。しかし、広告業者クラブ連合会やクリーブランド不動産業者連合会など、その業界独自の職業倫理訓が作成された事例はあるものの、全国的には満足できるような状況ではない。”



と述べた上で、

各業界において、職業倫理訓を起草する先駆けとなることは、ロータリアンの義務であると同時に特権である。

と明言しているのです。

具体的には、ロータリーの年次大会における業界別の協議会で、正しい商習慣の倫理訓を起草すべきであると、Guy Gundaker は主張しています。その場合、起草内容には下記が含まれることを求めています。



＜各業界で職業倫理訓を起草する際の留意点＞

1. すべての事業または専門職務に等しく適用される実務上の一般原則
2. 事業または専門職務の会員資格に関する規定
3. 会員相互関係に関する規定
4. 一般消費者との関係についての規定
5. 特別な仕様を取り決めた契約の作成と執行に関する規定
6. 好ましくない商習慣の禁止

Craft or professional codes should include the following:

1. *General rules of practice which apply equally well to all trades or professions.*
2. *A definition covering the qualifications of those eligible to membership in the craft or profession.*
3. *Statements covering relations between members.*
4. *Statements covering relations with the purchasing public.*
5. *Rules covering the making and executing of contracts with special reference to specifications.*
6. *Discouragement of practices which are reprehensible.*

【3】社会に対する「ロータリアンの義務と責任」~~~~~

ここは、本項目の冒頭で述べた「ロータリーの4つの信念」のうち、

「4. 自分の家庭、町、州、国に負っている**義務**」

について述べたものです。内容的には、本書の『3) ロータリアンたる者、かくあるべし

【2】ロータリアンにとって「活動」とは？ ④公共的かつ慈善的奉仕』(← P24 参照) について、Guy Gundaker が持論を大いに語ったものです。ここでも他の項目に比べると饒舌、脱線気味で、少なからず難解な内容ですが、分かり易く整理して解説いたします。

①「他人のための活動」は、ロータリーの会員教育をもたらす

Guy Gundaker は、

“ロータリークラブに入会した者は、ロータリーの原則と慣例に基づく教育を受ける。そして、ロータリアンは、その教育の成果を「個人の向上（自己改善）の分野」と「他人のための活動の分野」で示すことが期待されており、ロータリークラブで学べば学ぶほど、その期待に応えたくなくなってしまうのである。”

と述べ、

“後者の「他人のための活動の分野」が、自己の職業分野と社会に対するロータリアンの義務と責任に相当する“

としています。

上記に関連して、彼はロータリーの名誉会員について、

“ロータリーでは、名誉会員は不要である。特に、その町の居住者でない者や一次的な居住者、公職に一定期間ついている人などを名誉会員にすべきではない。なぜなら、規則正しく例会に出席できず、ロータリーで積極的に活動できない人は、ロータリアンにとって不可欠な二つの大切な要素（例会出席、クラブでの活動）を欠いているからである。”

と述べた上で、

“そもそも、名誉会員はロータリーの基本原理に矛盾するだけではなく、ロータリーで積極的に活動する会員の価値を減少させる。もしも名誉会員を認めるための抜け道があるとすれば、新入会員に関する会員選考委員会の厳格な審査は空しいものになってしまう。”

と言い切っています。

いずれにしても、

“ロータリーの例会は、学びの場である。例え名誉会員であっても、例会に出席せず、例会で学べないような人など、ロータリークラブの会員にしては**いけないのである。**“

という、Guy Gundaker のロータリーに対する強い思い入れを感じさせる内容です。

なお、この名誉会員についての記載は、Guy Gundaker の饒舌が過ぎて、本論からは脱線気味ですね。

②「良き家庭人」、「良き事業人」、「良き市民」

Guy Gundaker は、

“ロータリアンにとって、「他人のために何かしよう」という奉仕の心を実践する場合、最良の実践の場は家庭である。そこには家族愛があるからこそ、心のこもった態度で奉仕ができる。この家庭内での家族愛を実業の世界、そして町、州、国、世界へと及ぼし広げていくことが、ロータリアンの努め（義務と責任）と言ってよいだろう。”と述べています。要するに、

ロータリアンは、良き家庭人たれ！ 良き事業人たれ！ 良き市民たれ！

ということです。

そのために、ロータリークラブは、会員に対して以下の知識を提供するべきであると述べています。

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| * 町の地理 | * 地域社会の生活 |
| * 町の産業活動 | * 町の港湾地区と外国との交易 |
| * 交通機関の状況、諸問題 | * 公園や街路の状況 |
| * 総合的な都市計画 | * 町や地域の歴史 |
| * 消防、警察、厚生、福祉などの自治体行政 | |

その上で、彼はロータリアンに対して、

“ロータリアンは、自分が住んでいる町に対する正しい知識、強い関心、そして愛着を持ち、一人の市民として慈善的、博愛的、公共的な団体の会員として活動するべきである。ロータリアンなら、その団体の中で積極的、かつ効果的な活動をすることができるし、必要なことに対しては、金払いもよい会員となるだろう。”

と記し、

「ロータリアンが一人の市民として行う奉仕活動にこそ、大きな価値がある」

と述べているのです。

これは、Guy Gundaker のロータリーに対する考え方の特徴の1つでもある

- | |
|---|
| 1. ロータリーは、会員を「良い市民」、「業界団体の良い会員」、「所属する都市や国に忠誠を尽くす立派な人」となるように訓練をする場である。 |
| 2. ロータリーは、クラブとしての団体活動よりも、ロータリアン個人としての活動、またはロータリアンが所属する業界団体や市民組織の会員としての活動を通して、社会に貢献すべきである。 |

に繋がるものです。実は、この内容は

「1923年に採択された『決議23-34』の6)の内容（ロータリークラブにおける社会奉仕活動の選択の指針）」

に色濃く反映されています。（← P13参照）

③ ロータリーの中立性

Guy Gundaker は、ロータリーの社会的影響力を考えた場合、

ロータリークラブは、地元の問題や公共問題については慎重な態度で臨み、軽々しく決議してはならない。政治問題を取り上げることも、あってはならない。

と戒めています。

また、不適切な問題がむやみにクラブ例会で話し合われることがないよう、

「会員がクラブに提案したい案件は、先ず担当委員会と理事会に提出し、そこで十分に審議された後、クラブ提案にふさわしいと理事会が決定した場合のみ、理事会が次の例会で会員に提案する」

という手続きが必要であると述べています。

そのような手続きを踏まえた上で提案された問題については、

「理事会では、その案件がロータリーにふさわしい内容か、他のロータリークラブや国際ロータリーにどのような影響を及ぼすかなど、事前に十分な検討が必要である」

とした上で、

個々のクラブが、地元の問題、党派的な問題、国家的な問題などを取り上げる場合は、地区内で影響が及ぶ他の全てのクラブから了承を受ける必要がある。

という留意点も記しています。

実際、これまで、クラブの計画そのものがロータリー本来の姿にふさわしくなかったり、配慮が足らなかったり、慎重さに欠けたりなど、問題のある場合が少なくなかったことを Guy Gundaker は指摘し、憂いているのです。

また、国際ロータリーについては、ロータリークラブの設立や援助、運営の標準化を担うのであって、

国際ロータリーは、国家的または党派的な問題には一切関わってはならない。

と明記しています。

なお、本項目の最後で、Guy Gundaker は次の言葉を記しています。巨大組織と言えるほどに発展した現在のロータリーですが、それでも心に留めておきたい言葉です。

ロータリーの小さな義務をきちんと果たせばいいだけだ。
そうすれば、ロータリーの歯車は正しく滑らかに回るのだから。

*Only the small duties of Rotary can render
our Rotary wheel perfect and symmetrical.*

◎ 追記：ロータリーとは？

「A Talking Knowledge of Rotary」の熟読を繰り返し、Guy Gundaker の真摯で熱き想いに触れていくと、やがてロータリーが見えてきます。彼が生きていれば、現代のロータリーを次のように語るでしょう。

ロータリーは、事業、専門職務、地域社会のリーダーらによって構成され、親睦と寛容、個人の資質向上、事業の維持・発展に努めるとともに、家庭や仲間、職場、地域、国際社会における幸福の達成に寄与する「奉仕の心と実践」に満ちた立派なロータリアンを育てる世界的な団体である。

(Guy Gundaker のロータリー観を元に、最近のR I の方針も加味して私が作成した文書)

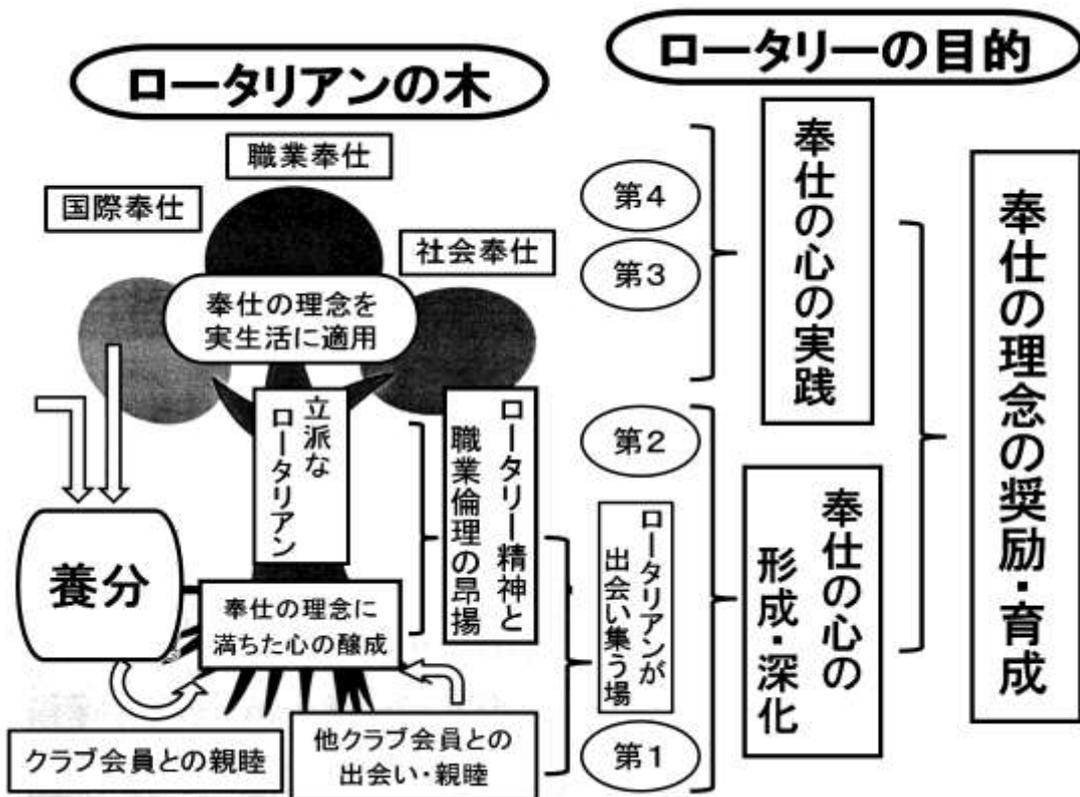
個人的には、上記で完璧だと思っていますが、文が長過ぎて皆さんに覚えてもらえないでしょう。そこで、次のような「最も簡潔なロータリーの定義」および「ロータリーの目的の図式化」を皆様に提案して、本書の解説を終了いたします。

ロータリーは、

- ①ロータリアン同士の親睦を基盤に、
- ②立派なロータリアンを育てながら、
- ③価値ある奉仕を通じて

社会に貢献する世界的な団体である。





(R I 第2800 地区で提唱している“ロータリアンの木”)

6. まとめ

【1】 Guy Gundaker が考える「ロータリーの根幹」

- ① ロータリーは、自分自身を、事業を、職種・業界を、そして社会全体を向上させる運動である。
- ② ロータリーの究極の目的は、世間から信頼・尊敬される素晴らしい真のロータリアンを育てることである。



【2】 Guy Gundaker が考える「ロータリーの姿」

ロータリーとは、
ロータリークラブにおいては「親睦と学びの場」であり、
ロータリアンにおいては「人間性の向上」をもたらすものであり、
仕事においては「事業の発展向上」に繋がるものであり、
世間においては「世の中を良くしていく向上運動」であり、
究極の目的は「素晴らしい真のロータリアン」を育てること
である。

【3】 本解説書の「要点」

註：私が意識した Guy Gundaker の珠玉の言葉を主にまとめたものですが、本稿で私が解説してきた“Guy Gundaker のロータリー観に対する私自身の解釈や考え方”を付け加えた上での言葉も少し混ざっていますので、ご了解ください。

<信用>

- ロータリアンは、現代の事業社会における最良の代表者（手本）である。それだけに、その名に恥じないような生き方をしなくてはならない。
- ロータリアンは、「ロータリークラブの会員であるというだけで、会員個人および会員の事業内容に絶大な信用がある」という幸せ（特権）を得るのだから、当然、ロータリアンとしての義務と責任を十分に果たさなくてはならない。
- ロータリアンは、安心して取引ができる人物である。その理由は、迅速で確実な取引を行うということで評判が良いからだけでなく、価格や性能の品質表示に偽りがない製品を提供することで評判が良いからだけでなく、公正で適切な取引を行うということで評判が良いからだけでなく、何と云っても、既にロータリアン（会員本人とその事業内容に絶大な信用がある人）だからである。
- ロータリアンは安心して取引のできる人物であることを、世に知らしめるべきである。だからこそ、全てのロータリアンは、信頼と奉仕の象徴として、常にロータリーのバッジをつけなければならない。

<ロータリアンの個人としての活動>

- 「ロータリアンの個人としての活動」とは、プライベートな活動という意味ではない。それは、自己の事業や専門職務において実践する『職業奉仕』そのものを指すのである。
- 「ロータリアンの個人としての活動」(職業奉仕)こそ、最も重要なのである。
- 「ロータリアンの個人としての活動」(職業奉仕)は、『道德律(職業倫理訓)』に記されたロータリーの諸原則を、自己の事業や専門職務において、ロータリアン一人一人がどこまで実践するかにかかっている。
- ロータリーを通じて『ロータリーの理想(奉仕という生き方)』と『事業推進に必要な倫理と経営方法』を学び、それらを日常生活の中で実践すれば、事業は向上・発展します。
- 職業倫理を旨とするロータリアンは、先ず自らの日常でロータリーの原則を実践せよ。

<ロータリアンの利益>

- ロータリアンの利益とは、商品の生産原価と販売価格との差額から生ずる利益のような、ちっぽけな物ではない。
- ロータリアンの利益とは、より立派で、より心の大きな人間となって、自分自身に対しても、同僚のロータリアンに対しても、そして社会全体に対しても、より素晴らしい奉仕を提供する機会が与えられることである。
- ロータリアンである以上、世間からの信頼と尊敬によって事業は向上・発展するでしょう。しかし、真のロータリアンにとっては、事業の向上・発展が利益なのではありません。本当の利益は、“見よ、あの素晴らしいロータリアンを！”と称賛される喜びと誇りです。我々は、素晴らしい真のロータリアンを育てるのです。

<新入会員>

- ロータリアン同士の取引はロータリーの義務ではないし、ロータリーの本質でもないし、ロータリーの存在理由でもない。ロータリーは職業人の集まりなので、単に、「取引増加の機会」が備わっているだけのことである。すなわち、ロータリアン同士の取引は、ロータリーにおいては単なる付随的な要素にしか過ぎないのである。
- ロータリーでは、会員であるという理由だけで、商取引が増えるなどと考えるはいけない。しかし、次のことは言える。
“ロータリーの例会は親しみと友情の種が蒔かれ、それが育つ場である。その種は、食事を共にするロータリーの例会では、すくすくと育ちやすい。したがって、入会后、ロータリー活動を通じて『信頼』や『人柄』が皆から認められるようになり、そこに真の友情が芽生えれば、『取引増加の機会』に恵まれたロータリーを活かせるようになり、商取引は増えていくだろうし、自己の事業の向上・発展にも繋がるだろう。”
- 新入会員の紹介は、夕刻の例会で行うことを推奨する。その際、クラブ会長は新入会員にロータリーの話をするを慣例として欲しい。これは、例会に参加している全会員に対して、ロータリーの理想を喚起するという意味でも重要である。
- ロータリーに入会したということは、名誉あるロータリアンという地位を引き受けたという意味であり、ロータリーの全ての例会へ常に出席する義務を負わなくてはなりません。
- ロータリアンになれる人にだけ、ロータリーへの入会を薦めなさい。

<教育的性格>

- ロータリーには、他のクラブにない特徴がある。それは、「教育的性格」である。
Rotary has a distinct field of its own and it is mainly educational in character.
- 我々ロータリアンは、ロータリアンが出会い集う全ての場（親睦を育む場）において、経営を学び、会合や事業の進め方を学び、交際術や人間関係を学び、奉仕の心と実践を学び、ロータリアンとしての在り方を学んでいる。
- ロータリーは、会員を「良い市民」、「業界団体の良い会員」、「所属する都市や国に忠誠を尽くす立派な人」となるように訓練をする場である。

<真のロータリアン>

- ロータリーは、自分自身を、事業を、職種・業界を、そして社会全体を向上させるために、ロータリークラブで「素晴らしい真のロータリアン」を育てている組織である。
- ロータリーは、人間の内面の体質を改善するのです。すなわち、ロータリーの中で体験を積み、成長することによって、「素晴らしい真のロータリアン」になっていくのです。
- 「ロータリーの究極の目的」とは、ロータリアンを世間から信頼され、尊敬される「素晴らしい真のロータリアン」に育てることである。

Evolution of Members of Rotary Clubs into Real Rotarians.

- 真のロータリアンになろうとする人達は、THE ROTARIAN 誌、各クラブの出版物、RI定款、道徳律、ロータリーの目的（綱領）などを真摯に熟読しなければならない。そして、差別なき友愛に満ちた交友に没頭し、事業経営理論を身につけるために、成長（向上）という名の努力を惜しんではならない。“
- ロータリアンは、他人の悪口や陰口を言ってはならない。

<親睦>

- 「ロータリーの親睦（fellowship）」とは、ロータリーという苗木が成長するために、その根に栄養を与えてくれる土壌のようなものである。
- 「ロータリーの親睦（fellowship）」とは、「ロータリーの志を共にする者同士の仲間意識」を強め高め合うことである。それこそが、ロータリーの成長をもたらすのである。
- ロータリーでは、『親睦』は必要で重要ですが、目的ではないのです。
- ロータリーの「親睦を育む場」とは、「ロータリアンが出会い集う全ての場」のことである。

<ロータリーの親睦（fellowship）>

ロータリーでは、ロータリアンが出会い集う全ての場（親睦を育む場）を通じて、ロータリアン同士の付き合いを

- “acquaintance”（知り合い程度の交友）
- “friendship”（親しい者同士の友情）
- “fellowship”（ロータリーの志を共にする仲間意識）

へと推し進めると同時に、

ロータリーの志をさらに強め高め合っていくことで、
栄養に満ちた“親睦”という土壌が醸成していくのです。

良い土壌でないと、ロータリーという苗木は立派に成長できません。



<同業者の団体>

- ロータリアンは、業界の代表者ではない。ロータリーから各々の職種・業界に派遣された、ロータリークラブの代表者（大使）である。
- 「同業者の団体におけるロータリアンの活動」とは、ロータリーからの大使(a messenger)として、他の同業者にロータリーの原理と理想を説き、「職業倫理の価値」と「利他主義の精神」を伝え、業界における低次元の考え方や悪しき商習慣を終わらせ、その業界を向上・発展させていくことである。それは、ロータリーにとって最大の奉仕の機会である。

This is Rotary's greatest opportunity for service.

<クラブ・リーダー>

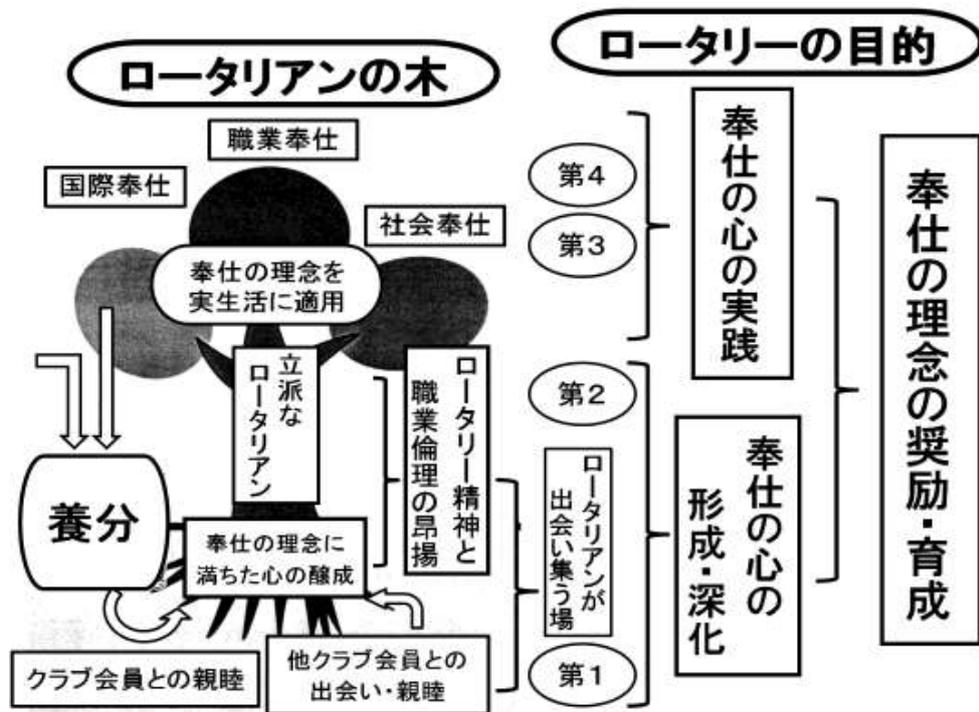
- 現状に満足せず、むしろ現状の問題点を見つけ出し、かつ改善していくことこそ、ロータリークラブの「会員に対する義務と責任」である。ロータリーが掲げる理想を達成するには、こうした不断の努力がクラブ・リーダーに必要である。
- 例会プログラムの年間スケジュールを計画立案する年度当初の理事会は、極めて重要である。例会プログラムの年間計画の立案が、「RIの年度テーマ、地区目標、クラブ会長方針などの実現・達成に、役立つものとなっているのか」と「会員自身の向上や会員の事業向上にとって、有意義な例会内容と言えるのか」について、十分な審議が必要である。
- クラブ行事、特に例会の充実こそが、「ロータリーと社会の発展」に繋がるのです。そして、その責任者はクラブ会長です。
- クラブ会長は、強力なリーダーシップを発揮する責務がある。理事が無関心であるからとか、委員が積極的でないからとかを理由に、会長はこの責務から免れることはできない。
- クラブ会長にとって、会員のロータリーに対する志を高めるために、そして会長に対する信頼と敬愛の念を得るために、さらにクラブの活性化をもたらすために、最大の武器となるのは会長スピーチである。それだけに、スピーチの内容はもちろん、話すスピード、抑揚、間、表情、ジェスチャーなどにも気を配りながら、毎回、心が洗われるような「会長スピーチ」に尽力しなければならない。

<ロータリーの基盤、基本、応用、真髄>

- ロータリーは、選ばれた異業種の仲間がロータリーの志を共にし、強め高め合いながら、立派なロータリアンに成るべく精進し合うのです。そして、この「親睦」と「学び」こそが、「ロータリーの基盤 (the base of Rotary)」なのです。
- 『ロータリーの基本 (Fundamental Rotary)』とは、「会員自身の向上」と「会員の事業の向上」をもたらすクラブの諸活動のことであり、クラブ・リーダーの責務である。
- 『ロータリーの応用 (Applied Rotary)』とは、「会員の職種・業界全体の向上」と「会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上」に関するロータリアンの諸活動のことである。これは、『ロータリーの真髄 (The essence of Rotary)』と言ってもよい。ロータリーで十分に教育と訓練を受けた会員なら、そうした活動 (Rotary - at - Work) を自然と始めてしまうものであり、それは「個々の会員」の責務である
- Guy Gundaker の『ロータリーの基本と応用』で示された考え方は、1923年の『決議 23-34 (冒頭の文章)』、そして現在の『ロータリーの目的 (第3)』に受け継がれている。

<ロータリーとは？>

- ロータリーは、事業、専門職務、地域社会のリーダーらによって構成され、親睦と寛容、個人の資質向上、事業の維持・発展に努めるとともに、家庭や仲間、職場、地域、国際社会における幸福の達成に寄与する「奉仕の心と実践」に満ちた立派なロータリアンを育てる世界的な団体である。
- ロータリーは、「①ロータリアン同士の親睦を基盤に、②立派なロータリアンを育てながら、③価値ある奉仕を通じて社会に貢献する」世界的な団体である。（もちろん、「価値ある奉仕」の中で最も重要なのは、職業奉仕である。）



(R I 第 2800 地区で提唱している“ロータリアンの木”)

<クラブ運営>

- 「会員一人一人の向上」(会員の質の強化)こそが、会員数の増加に繋がる。
- 「例会運営、会長挨拶、例会プログラム、委員会活動」の4つの充実こそが会員増強の極意であり、クラブ会長の最大責務である。
- ロータリークラブは、地元の問題や公共問題については慎重な態度で臨み、軽々しく決議してはならない。政治問題を取り上げることも、あってはならない。
- 不適切な問題が、むやみにクラブ例会で話し合われることがあってはならない。会員がクラブに提案したい案件は、先ず担当委員会と理事会に提出し、そこで十分に審議される必要がある。具体的には、その案件が「ロータリーにふさわしい内容か、他のロータリークラブや国際ロータリーにどのような影響を及ぼすか」など、十分な検討が必要である。その結果、クラブ提案にふさわしいと理事会が決定した場合のみ、次の例会で会員に提案するという手続きを理事会が行うのである。
- 個々のクラブが、地元の問題、党派的な問題、国家的な問題などを取り上げる場合は、地区内で影響が及ぶ他の全てのクラブから了承を受ける必要がある。

<例会>

- 「ロータリークラブにおけるロータリアンの活動」とは、例会で、会員同士が討論、情報交換、意見交換をすることである。
- ゲストスピーカーのスピーチは、会員にとって有益である。しかし、クラブ会員自身のスピーチは、それ以上に有益であり、それを聴ける機会こそクラブ会員の大きな特権の1つである。なぜなら、クラブの会員たるスピーカーは、同業者の存在を気にすることがないだけに、正直に真実を語るからである。
- 例会は、クラブ会員の向上、会員の事業の向上、そして『ロータリーの目的』の実現のためにこそ、最大限に活用する場である。
- 例会は、会員がロータリーの高い理想と意欲に燃えて、「自分の仕事、自分の業界、自分の家庭、自分の町や州や国に対して優れた奉仕をしよう」という決意を新たにすることで欲しい。“
- 「奉仕の扉を開く例会」とは、会員が奉仕の心を学び、理解し、価値ある実践に繋げていけるよう、奉仕の意欲を湧き立てていく例会のことである。
- 夕刻の例会で、行事や議事、プログラムなどをなおざりにして、早めに懇親会へ移行しようという不埒な考えを、ロータリアンたる者、決して抱いてはなりません。“
- ロータリー運動におけるクラブの価値は、ロータリアンがクラブの例会に、どのくらい積極的に出席するかにかかっている。
- 出席率が高く、退会しない会員こそ、クラブの大きな財産である。
- 例会に欠席が多そうな会員は、クラブを衰退させるので、入会させてはならない。
- クラブの会員は、誰もが仕事で忙しい中、時間を自己管理できる経営者であるからこそ、仕事をやりくりして例会に出席しています。それは、食事のためではなく、例会に身を置きたいと思う「何か」が十分にあるからです。だからこそクラブ会長には、その「何か」について、きちんと提供しているという認識と自負が必要なのです。その「何か」が十分でない例会であれば、当然、例会の欠席者は増えていくでしょう。
- ロータリーの高邁な理想を実現させていくには、与えられた例会時間は如何に少ないか。
- 欠席者が多い例会は、その例会に魅力や価値がない証拠である。
- 毎回、心が洗われるような「会長スピーチ」が行われているクラブでは、例会欠席者は少ないのではないのでしょうか。

<その他(1)>

- ロータリークラブの設立や援助、運営の標準化を旨とする国際ロータリーは、国家的または党派的な問題に、一切関わってはならない。
- 奉仕とは、奉仕すべき『事』と『人』とを行動に結びつけようとする心の過程である。それは、「奉仕をしたいという『利他の心』の現れ」である。
- ロータリークラブは、「ロータリーの目的」の達成を目指すものであり、会員自身の成長、しいては会員の事業の向上にも繋がるものです。さらに、多くの出会いや親睦、奉仕を通じて、会員の人生を豊かなものにしてくれるのです。
- ロータリーの小さな義務をきちんと果たせばいいだけだ。そうすれば、ロータリーの歯車は正しく滑らかに回るのだから。

Only the small duties of Rotary can render our Rotary wheel perfect and symmetrical.

＜その他（2）＞

- ロータリアンとは、奉仕能力の涵養を切望し、かつ奉仕に専念する人のことである。
- ロータリアンは、ロータリーの原理を体得するにつれて奉仕能力が向上するだけでなく、進んで奉仕したいという意欲が湧き上がり、奉仕に身を捧げるようになる。
- ロータリークラブに入会した者は、ロータリーの原則と慣例に基づく教育を受ける。そして、ロータリアンは、その教育の成果を「個人の向上（自己改善）の分野」と「他人のための活動の分野」で示すことが期待されており、ロータリークラブで学ば学ぶほど、その期待に応えたくなくなってしまうのである。
- ロータリアンが一人の市民として行う奉仕活動にこそ、大きな価値がある。
- ロータリーは、クラブとしての団体活動よりも、ロータリアン個人としての活動、またはロータリアンが所属する業界団体や市民組織の会員としての活動を通して、社会に貢献すべきである。
- ロータリアンは、自分が住んでいる町に対する正しい知識、強い関心、そして愛着を持ち、一人の市民として慈善的、博愛的、公共的な団体の会員として活動するべきである。ロータリアンなら、その団体の中で積極的、かつ効果的な活動をすることができるし、必要なことに対しては、金払いもよい会員となるだろう。“
- ロータリアンが奉仕の心を実践する場合、最良の実践の場は家庭である。そこには家族愛があるからこそ、心のこもった態度で奉仕ができる。この家庭内での家族愛を実業の世界、そして町、州、国、世界へと及ぼし広げていくことが、ロータリアンの努め（義務と責任）と言ってもよいだろう。“
- （職業も含めて）生活のあらゆる機会に“価値ある奉仕”を実践することこそ、ロータリアンの「使命（命の使い方）」である。
- ロータリアンは、良き家庭人たれ！ 良き事業人たれ！ 良き市民たれ！
- ロータリーは、人生を豊かにする。
- 見よ、あの素晴らしきロータリアンを！

以上、この「6. まとめ」の項目を読んだだけでも、日本のロータリアンが学び、培ってきた「ロータリー観」が、Gundakerの「A Talking Knowledge of Rotary」（1916年）に由来していることにお気づきになるかと思います。

（終）